人間の運命とチュチェ哲学

- 人間の運命についての歴史的な論議
- 社会・歴史と人間の運命
- 人間は自己の運命の主人である
- 世界観と人間の運命問題
- 歴史の主体と運命の開拓
- 運命開拓の基本的な方途

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

人間の運命とチュチェ哲学

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

はじめに

大洋を航行する船には羅針盤が必要不可欠であり、さらに港湾や岬には灯台があって船舶の航行の安全がはかられなければならない。これと同様に人間の人生行路においても紆余曲折のない生涯を送るには、それぞれに必要な「羅針盤」、人生の前途を照らし導く光がなければならない。

人生の羅針盤、前途を照らし導く光はほかならぬ哲学である。

哲学は世界観に関する学問であり、したがって人間の運命問題とじかにつながっている。

実際、哲学思想は人間の運命に関する問題の解明を根本として発生したのである。

こうした哲学の根本を強調して、ある哲学者は、「誰であれ哲学なしには不安を知らずに暮らしていくことは難しい。助言を要するさまざまの問題が時々刻々次々に持ち上がるからである。ところで、助言はひたすら哲学によってのみ得られるのである」と強調している。

運命に関する問題はそれぞれの国や民族、個々人にとって最大の関心事となっている。

それゆえ、いかなる国であれ自らの政治理念や政治哲学を持っており、人々はわが運命についての哲学的見解を持つようになる。

朝鮮にも自国に特有の哲学思想がある。それは周知のように、人間を哲学的考察の中心に据えてその運命問題に正確な解答を与えるチュチェ哲学である。

朝鮮人民が思想的・精神的支柱と見なしているチュチェ思想は、チュチェ哲学を思想・理論ならびに方法論の基礎としている。

朝鮮の現代史は、そこにチュチェ思想が具現され、勝利を遂げてきた自主と創造の歴史、驚異の出来事や世紀的変革によって彩られた刮目すべき年代記であった。

社会主義強国の建設が本格的段階に入った今日の朝鮮においても、チュチェ思想の強力な牽引力と旺盛な生活力は遺憾なく発揮されている。

本書は、チュチェ哲学の原理と内容を、人間の生活、人間の運命問題と結びつけて解説し、併せて朝鮮人民がわが運命の主人として新しい歴史をいかに作り上げてきたかについて叙述している。

目　　次

人間の運命についての歴史的な論議…… 5
人間の運命とは何か …… 6
歴史に現れた諸思潮 …… 9
新たな時代思想の出現 …… 14

社会・歴史と人間の運命…… 20
地獄の類型 …… 21
矛盾と対立 …… 23
団結と協力 …… 27

人間は自己の運命の主人である …… 31
人間はいかなる存在なのか …… 32
運命の舵を取り運命の櫓を漕ぐ …… 39

世界観と人間の運命問題…… 43
世界に対する従前の見解 …… 44
人間を中心に据えて見た世界 …… 48
世界に対する観点と立場 …… 54

歴史の主体と運命の開拓…… 59
人民大衆は最も有力な存在 …… 60
自主は社会・歴史の不変の軌道 …… 64
社会・歴史は人民大衆の創造の歴史 …… 68

運命開拓の基本的な方途…… 74
自主的立場を守るべきである …… 75
創造的立場を守るべきである …… 79
思想を基本とすべきである …… 84

むすび…… 89

人間の運命についての歴史的な論議

人間の運命についての思索と探究は、人類の歴史の開始と共に始まった。

人類はそれぞれ自己の運命について考え、それを切り開く道を求める活動を行うことで歴史を開始したと言えよう。

厳しい自然との苦しい闘いの中で始まり進められた歴史の過程で、わが運命についての人間の思索と探究はさまざまの様相を呈した。

そのような中で見いだした「幸運の妙案」は、その正しさを論述する理論のベールに包まれ、当該社会の哲学思想として広まっていった。けれども、そのような思想は一つに限られているのではなく、そこにさまざまのものが出現し、やがてその一つが優勢を示すか、あるいは複数の思想が折中融和して一つにまとまったりもして当代社会を支配する思想となっていったのである。

とはいえ、歴史の流れの中でさまざまに現れる運命論の中から、人々が自分のための正しい思想を見いだして受け入れるのは決して容易ではない。世界のおびただしい人たちが受難と紆余曲折、失敗と苦難を余儀なくされた人類の歴史がそのことを実証している。

人間の運命とは何か

人類の歴史は、運命についての考え方、その主張が交錯した道程であったとも言えよう。

人々が生活の中で語り合う話題の中でかなり多くの比重を占めるのは、各人の将来の運命問題ではなかろうか。そうしてみると、それぞれの運命こそが人間の重要な関心事であることを示唆している。

人間の認識活動と実践の根本的目的は切り詰めて言えば、自己の運命を開くことにある。

誰であれ人間はわが運命について考え、つつがなく切り開かれていくことを願っていると言えよう。

そういうわけで自分たち自身や第三者の運命についてのさまざまな話題の中で重点をなすのはおおよそが、各人の社会的地位に関する問題であると言ってよい。

人間の運命問題についての話題の基本をなすのは、自分やある第三者が現在のような社会的境遇に置かれることになった過去の生活の経緯とか、社会的地位が変化する過程、あるいは社会的地位が変化する見通しなど、社会的地位にかかわることだと言える。

こうしてみると、人間が自らの運命を切り開いていくということは、つまり自らの生活境遇を改善していくということを意味する。

人間は誰もが自分の生活上の願望を存分に実現し、誇り高く幸せに生きたいと思っている。そうした中でより大きな幸福を志向し、わが生活境遇を改善していくこと、これが自らの運命を開いていく過程なのである。

ところが現実が示しているように、世界のすべての人がそのように希望に満ちた運命のコースを歩んでいるのではない。

世界には生まれた瞬間から幸せに満ちた楽しい生活を送る人たちがいる反面、不幸と苦痛しか知らずに生きている人たちもいる。そんな世界で一生まじめに働いて生きる人間や遊んで暮らす人間、ひたすら善行を旨として生きる人間や悪事を事とする人間などが交錯している。

人間の境遇がさまざまに移り変わる例として、朝鮮封建王朝時代の有名な作家にして学者であった金時習(1453～1493)の生涯を簡単に振り返ってみよう。

彼は幼くして早くもすぐれた詩を詠み、神童として世に知られ、両親や世人から将来を嘱望された。その期待を裏切ることなく、若くしてすぐれた作家、学者として大成したが、その生涯は平坦でなかった。15歳の年に愛する母親に死なれ、1455年には、首陽大君(在位1455～1468)がその甥の端宗(在位1453～1455)を追って王位を簒奪したことに憤慨して下野し、僧の姿に身をやつして放浪生活を続けた。40歳をすぎて妻をめとったが、その幸せな家庭生活は長続きせず、間もなく妻は一人の世継ぎも残さずに病死した。彼はまたしても放浪生活を続け、60歳にもみたず淋しく世を去った。

このように人間の人生行路は必ずしも平坦でなく、むしろ紆余曲折を経る場合が少なくない。

ところで、人間の多様な運命に詳細な目を向けてみると、そこにある一定の法則が作用していることに気づくのである。

石を投げると、それは必ず地面に落ちる。これは万有引力の作用による必然的な結果である。

人間の運命の変化もそこに存在する固有の法則によって起きるのである。

人間は一定の条件、環境の中で生活し、その中で自らの運命を開いていくが、生活の中にある一定の条件が生ずると、そこには必然的に運命の法則が作用し、人間はその法則に従って生活を変えていく。けれどもこれは決して、人間があらかじめ定められた人生コースを積極的に受け入れ、その結果に甘んじるということではない。

以前は少なからぬ人が自分たちの苦労はどうにもしようのないことであり、誰が幸せに暮らし、誰が惨めに生きるかということは前世の定めであるとして苦労に耐えて生きたのである。

前世の定めという言葉には、人間の運命は既に定められた各人の人生コースに従い、それを望もうが望むまいが必然的に歩まなければならないという意味がこもっていた。

もちろん、汚れた社会で善良な人たちが苦労を余儀なくされざるを得ないのは、必然であり、一つの法則である。しかし、それが前世の定めであり、人間の力ではどうしようもないと見るのは誤りである。汚れた環境をきれいに清めて、幸せな生活

を実現しうる必然的な道もあることを知るべきである。

その道にどうすれば入りうるかを人々は知らなければならない。速やかにその道に入れば、それだけ早く幸せな生活に巡り合い、ぐずぐずすればそれだけ遅延することになる。そのまま立ち往生してしまったり、途中で引き返したりすればもはや絶望である。

正しい運命開拓の道を見いだし、横たわる障害を克服してあくまでも前進を続けるならば、必ずや理想を実現することができるのである。

しかしこの大業は一人や二人の力で成しうるものではない。障害の大きい道を進むには、すべての人の力が合わされなければならない。

確実な判断力と高度の才知、不屈の意志をたゆまず培養し、社会的な団結と協力を強化していけば、必ずや光栄と繁栄の道が開かれるということこそ、運命の開拓の道理である。

この道理に基づき、立ちはだかる試練をことごとく乗り越えながら人間の運命は不断に前進しうるということが、今や歴史によって実証された真理である。

歴史に現れた諸思潮

歴史的に人間の運命を左右した思想潮流にはどのようなものがあったのだろうか。

これを知ることは単に過去についての知識を得ることにとど

まらず、受難の道を歩んだ人間の運命から得た経験と教訓を明確にする上で必要な過程である。教訓は守り、過ちは繰り返されるべきでなく、経験は重視し大切にしなければならない。

運命は定められていると考える主張と並んで、今一つの主張が長い期間存在し続けて人間の運命に関する考え方を支配した。

それは、人間が死ねば天国へ行こうが地獄へ落ちようが生きている人間には何の関わりもなく、その実際を知るよしもないとして、来世のことよりも自分たちの生きている現世を、死よりも生きている生活をより重視すべきだとする傾向である。

このように現実の生活を重視する人たちの志向を反映して、歴史には運命開拓の新たな道を指し示す社会政治思想が出現し、それらの思想を受け入れて人生を生きてゆこうとする方式が導入され始めた。

それらのうちの代表的な考え方は、徳政への期待つまり仁君による政治が必要だとする主張であった。

人間の運命は生活の中で開かれ、生活は現実の中にある。人々が生きている現実に対して最も大きい影響を及ぼすのは政治である。それは、政治が人々の社会政治生活に及ぼす重要な役割と関連している。政治は人々の生活と運命に極めて大きな影響を及ぼす。いかなる政治が行われるかにより人々の境遇には大変な違いが生じ、そこに人々の運命が根本的に逆転する事態が生じもする。

かつて旧社会の政治の下で非人間的な侮辱と蔑視を受けてき

た人たちは徳政を夢見た。徳政の下で生きてみたいという思いは、来世よりも現世を重視する大多数の人たちの切実な期待であった。

彼らは、君主はもとより大臣や地方長官に至るすべての官僚が善政をしいてくれることを願った。

とはいえ、徳政の下で幸運にあずかりたいと願う人々の切望を巧みに悪用してより狡猾な人民統治策が考案され、そうした中で徳政を論ずるとりどりの社会政治思想が登場した。

徳政への期待は朝鮮においても強かったし、それを反映した思想がさまざまに現れはしたが、現実の政治に取り入れられたためしはなかった。

そうした実情にあって人々は個々の地方長官の良心に訴えて、自分たちの境遇をいささかなりとも改善してみようと試みたが、それらは無駄な骨折りにすぎなかった。そこで、悪辣な地方長官を罰し、不幸な人たちを救ってくれるよう国王に請願書を送ることもあったが、いずれも逆効果で、そのような人たちは王の逆鱗に触れて極刑に処せられるのが落ちであった。

歴史は、人民が期待した仁君の出現による徳政なるものは搾取社会には存在しなかったし、実在しうるものでもないことを実証している。

実際、人間に対する人間の搾取と抑圧が存在する社会に仁君や恵み深い官僚なる者の存在する余地はなく、徳政なるものは夢物語にすぎないのである。

徳政が現実として実現しうる社会とは、人民が真の国の主人

になった、人間による人間の搾取と抑圧が根絶された社会である。そのような社会では人間相互の関係が愛と信頼の関係に変わり、人民の真の幸せをはかる政治が実現しうるのである。

人々は長い歴史の流れの中で、運命開拓の新たな道を探り始め、やがてマルクス主義が出現し、「全世界の労働者団結せよ！」という勤労人民大衆のための新しい旗印が打ち出されたのであった。

マルクス主義は、個々人の力だけでは人間の解放はなされえず、集団的に団結した労働者階級の力によってのみ、人間による人間の搾取と抑圧を一掃して、人間の真の自由と平等を実現しうると指摘した。

資本主義制度の出現と共に社会に登場した労働者階級は、資本の力に支配されて生きる社会の最下層の人たちの集団である。

労働者たちは最初、機械や工場が生じたせいで過酷な労働を強要され、それからさえはずされた者は失業の憂き目に会うとして機械打ち壊し運動を始めた。

機械の出現と改良こそは労働者の失業と過重労働や貧困を生む原因であり、それでなくても常に労働者が余っている資本主義諸国において、首を切られるのは金の蓄えのない労働者であり、それは恐ろしい災厄であった。10人分の仕事をする機械の出現で9人が職を追われるとして、機械打ち壊し運動に乗り出したのであるが、新しい機械は間断なく現れて、労働者の失業と貧困はいや増すばかりであった。

労働者たちはこの苦境を打開すべく、政府の支援に期待をか

けて、議会に請願する運動を始めた。これが当時イギリスにおいて始まったチャーチスト運動である。

けれどもこのチャーチスト運動もやはり骨折り損のくたびれ儲けに終わり、労働者たちの境遇は一向に改善されなかった。

そのような事態に注目したマルクス(1818～1883)は、労働者の境遇は民族ごとに異なるのではなく、国際的に共通しているということ、その敵対勢力も国際的に結びついており、労働者たちの階級的解放の条件も国際的に共通しているということなどを指摘して、団結した労働者たちが先頭に立ち、革命的暴力をもって古い社会をくつがえせば、失うものは鉄鎖であり、得るものは全世界であるとして、全世界の労働者は団結せよと呼びかけたのである。

マルクス主義の掲げた階級解放の旗は神秘主義と宿命論を打破し、無産者大衆の覚醒を促すとともに、彼らに今や新しい運命を選択しうるという確信を抱かせた。

こうした歴史の流れの中で、1917年、ロシアの巡洋艦「アブローラ」号の砲声が上がり、ここにロシアの10月社会主義革命が始まったのである。

「アブローラ」号の砲声は、世界の人民に自分たちの運命を救う解放の道、新たな闘争の方法を教えた。

こうして、マルクス・レーニン主義は帝国主義の圧制を粉砕し、人間の新たな運命を誕生させうる当代の時代思想になった。

ところが、社会主義の基盤が出来上がったとはいえ、人々の運命を拘束する要因が完全に払拭されるまでには至らなかった。

自然と社会の至る所に人間の運命を拘束する旧社会の遺物は根強く残っているのである。

人間の運命問題を完全に解決するには、自然と社会それに人間自身を改造する取り組みを間断なく続け、革命を自主的、創造的に粘り強く推し進めていかなければならない。

ところが世界で初めて社会主義革命に成功し、社会主義を建設していた国々の人たちはこれに気が及ばず、結局、マルクス・レーニン主義は過去のものになってしまった。

新たな時代思想の出現

環境に変化が生じ時代が変わると、人間の運命問題も新たな様相を呈することになる。したがって、時代が交替する時期は人間の運命問題に転換が起きる分岐点だと言える。

新しい時代の到来は新しい時代思想を求めたが、新時代の前途を指し示し導く新しい思想を打ち出すことは誰にでもできることではない。それは、新時代の要請を正確に捉え、それに全面的な解答を与える革命のすぐれた指導者によってのみ可能なのである。

1919年に結成されたコミンテルンは1943年に解散した。コミンテルンは10月社会主義革命の成果を守り、それを世界的領域に広げていくことを目標にしていた。けれども、コミンテルンの指揮の下に進められていた各国における闘争方式が行き詰まりを見せたことで、コミンテルンの存在が影を薄め、もはや

存在する必要はなくなったとして、1943年に解散したのであった。これは、以前とは異なった新しい時代の到来による必然的な成り行きであった。

1910年代末～1920年代初に至った頃、わが運命の主人として生き発展を遂げようとする人民大衆の革命闘争はそれぞれ異なる環境と条件の下で進められ、多様な様相を呈し始めた。階級的支配と従属関係の打破を基本とする階級闘争を進めている国もあれば、帝国主義の植民地支配下の人民の民族解放闘争を進めている国もあった。

立ち遅れた半封建国家であった朝鮮の場合は、日本帝国主義の軍事的占領(1905～1945)の下で、階級闘争と民族解放闘争を同時に進めている状態にあった。

1919年に起きた全国的な3・1人民蜂起は、日本帝国主義の野蛮な植民地支配の下で苦しむ全人民の積もりに積もった怒りが爆発したもので、この闘争を転機にして朝鮮人民の民族解放闘争は新しい様相を呈し始め、経済闘争一面に片寄っていた労働運動や農民運動その他の大衆運動が次第に暴動的な性格を濃厚にしていった。

当時の運命の開拓を目指す朝鮮人民の闘いが激烈多様に、組織的性格を濃厚にしながら展開されるようになったという事実は、人々が外部から強いられた運命をすなおに受け入れていた時代、人間の運命が支配階級の玩弄物となっていた搾取と抑圧の時代が終わりを告げつつあるということを示唆している。

言い換えれば、歴史的にもろもろの社会的桎梏にひしがれて

いた勤労人民大衆がわが運命を自らの手に握り締め、それを自分自身の意思に即して開いていく新しい時代が到来しつつあることを暗示している。

この時代こそは、人民大衆が歴史と自己の運命の主人となり、それらを自主的、創造的に開いていく、新しい時代、自主の時代なのである。

広範な層の人民大衆が自己の運命の主人として登場する歴史的な状況の下で新しい時代は新しい思想・理論を求めた。

金日成（キムイルソン）主席は、先進思想の探究に熱中していた中国・吉林における中学時代、マルクスとレーニンの主要著書にほとんど通暁しているという朴素心（のちに反帝青年同盟と朝鮮共産主義青年同盟に加入）にこう質問した。

マルクス・レーニン主義の著作では階級的解放を先立て、民族の解放はあとでなされるとしているが、わが国の場合は日本の植民地支配からの民族の解放を先立たせ、階級的解放はそのあとでなされるべきではなかろうか。それにマルクス・レーニン主義では、一般的に宗主国における革命と植民地における革命は有機的に結びついているとして、宗主国における革命の勝利の意義のみを強調しているが、それでは、日本の労働者階級が革命に勝利せずには朝鮮の独立は不可能だからわれわれは彼らが勝利するまで何もせずじっと待っていなければならないということになるのではないか。

これに対して朴素心は、階級的解放を民族の解放に先行させ、また宗主国労働者階級の闘争を植民地の国々の民族解放闘

争より重視するのは、世界的に公認されている国際共産主義運動の路線に関する問題だと答えただけだった。

当時を振り返り、主席は次のように語っている。

「そのとき、われわれがマルクス・レーニン主義先進思想を研究しながら感じた最大の苦衷は、われわれもロシア人のように革命を起こして社会を変革し、国を解放しなければならないのだが、朝鮮の実情と10月革命当時のロシアの実情は同じではないということである。

立ち後れた半封建国家である朝鮮のような植民地国で無産者革命をどう起こすべきか、日帝の過酷な弾圧のため祖国を離れ中国の土地で闘わなければならない状況のもとで、中国など隣国の革命とどう連係を保ち、朝鮮革命に対する民族的任務と世界革命に対する国際的任務をどう遂行すべきなのか、といった複雑な問題が提起されていたのである。

われわれがそうした問題に対する正しい解答を得るまでには長い歳月を要したし、また高価な代償を払わなければならなかった」

新しい時代は、新たな革新的眼目と基準をもって国と民族、人間の運命開拓上の諸問題を解くことを求めた。

この新たな眼目と基準とは、人民の利益、自国の具体的な実情に則ってすべてを見、対応する観点と立場である。

事大主義や教条主義に捉われて、新しい時代が求める眼目と基準を確立できずにいると、何事であれ腰砕けになるのが落ちである。

旧時代の絶対多数の人たちは少数の支配階級に従属し、搾取と抑圧の対象とされてみじめに生きてきた。代が代わっても事情は変わらなかった。彼らはそうした境遇をどうすることもできない運命だとしてあきらめていた。

この運命への諦念が完全に打破されたのは、今日の自主時代に至ってからである。自主の時代を迎えて、自分の運命は自分自身が掌握し決定する強力な武器、新しい思想が生み出される歴史的な出来事が生じたのである。

金日成主席は、初期革命運動に従事していた当時、それまで朝鮮の民族主義運動と初期共産主義運動に内在している二つの弱点を発見した。

一つは大衆と離脱して上層部の何人かが集まって空理空論に明け暮れ、ヘゲモニー争いに没頭していることであり、今一つは外部勢力の援助に空しい期待をかけていることであった。

主席は、朝鮮の民族主義運動と初期共産主義運動のかかる本質的な弱点を明確に指摘した上で、革命の主人は人民大衆であり、人民の中に入って彼らを教育し、奮起させてこそ革命闘争で勝利することができ、革命は自分の信念に基づいて自分が責任を負って遂行し、革命の遂行上持ち上がる問題をすべて自主的、創造的に解決していかなければならないという真理を発見した。

これは、1930年6月の卡倫会議で自主時代の新しい指導思想、チュチェ思想を宣言した歴史的な出来事につながった。

チュチェ思想の創始は、朝鮮人民に自主性に対する自覚、自

主性を生命と見なす観点を植え付けたのである。

チュチェ思想は、自主的に生き発展しようとする人間の本性に立脚し、自然と社会、自分自身を全面的に改造して、人々を世界と自己の運命の完全な主人にならしめ、人間の運命開拓の道を示した革命の学説である。

チュチェ思想は、非人間的な蔑みにこらえきれず、積もりに積もった憤りを爆発させて立ち上がった人民大衆の姿を通して、人間は自主的権利を渇望しており、自主性こそはいかなる者も抑制しえない人間の本性であることを明らかにした。

チュチェ思想により朝鮮人民は、自分の運命問題はまさしく自主性に関する問題であると悟った。

長年旧社会の下層に埋もれていた人民大衆は、チュチェ思想の出現により、歴史の創造者としての自分たちの地位と役割に気づき、運命開拓のための道をまっすぐ進むようになった。こうして人民大衆が歴史の中心に立って、目的意識的な創造的闘争によって社会を発展させ、自らの運命を主動的に切り開いていく新しい歴史が始まった。

チュチェ思想は朝鮮革命に立派に具現され、その真理性が実証された。

チュチェ思想を革命の指導指針として、朝鮮は植民地民族解放の最も正しい道を切り開き、社会主義革命と社会主義建設で持ち上がるあらゆる問題を自主的に、創造的に解決することで、人民大衆の運命開拓のための前人未踏の道を成功裏に歩み続けた。

社会・歴史と人間の運命

人類が発生したことは、数十億年を超える長くも長い地球の歴史における何よりも大きな意義を持つ出来事であった。もし人間が社会生活を営まず、他の動物と変わりのない生活を続けたとしたら、今日の社会的存在である人間は存在しないであろう。人間は社会を成して生活したからこそ人間にのみ見られる、自主性、創造性、意識性を具有しえたのである。

人間は社会を離れては生きていけない社会的存在であるが、歴史に存在したすべての社会が各界層の人々の要求を満足させたのではない。特に、古い搾取社会では勤労人民大衆の自主的要求が無残に踏みにじられていた。

福中にあって福の有難さに気づかないという言葉がある。

わが幸せの真の価値を知るには、隣人の不幸と苦しみに思いを致せば良いし、さらに思いを深めるには、悪運にさいなまれて生きた人間の歴史を知るべきである。

それは、世界の支配者、改造者としての人間の発展の歴史であると同時に、間断なく人間を脅かすさまざまの過酷な環境に打ち克つための苦しい闘いの歴史でもあった。

人間の運命を切り開く苦しい闘いは、変化し発展する社会のどの時代においてもうまずたゆまず続けられたのである。

地獄の類型

人間の長久の歴史を具体的に知るのは容易でない。人類の黎明期にさかのぼるほどに困難は深まる一方である。

けれども、古代の奴隷制社会は後世に一定の痕跡をとどめた。古代における人間の運命についてはさまざまの資料を通してある程度推定できるが、古朝鮮における階級分化の政治的産物であった成文法『犯禁八条』をもってしても、当代の人たちの生活の一端をうかがい知ることができる。

古朝鮮の成文法『犯禁八条』のうちで今日も知られているのは3カ条のみである。

その一つは、他人を殺した者は死刑に処するとしている。

この条は一見肯定的かつ合理的であるようだが、当代社会が奴隷制社会であることから考え合わせると、奴隷主が奴隷をはじめ被支配階級の人間を殺すことに対しては法の外にあって適用されないと判断してしかるべきである。奴隷は奴隷主が思いのままに扱える私物であり売り買いもされる、物を言うただの品物に過ぎない。彼らには名前もなく、家族も持てず、夜は男も女もみんな一つの部屋で寝なければならない。

そんな生活の中で女が子を生むと、その子はやがて売買の対象となったり、他人への贈り物として利用された。奴隷は牛馬のようにこき使われ、物を言う道具と見なされていたので、生かすも殺すも奴隷主の思いのままであり、奴隷主が死ぬと殉葬

品として生き埋めにされた。

『犯禁八条』の殺してはならないとした他人なるものも奴隷主を念頭に入れたものである。予想される奴隷の反抗で殺されるのは奴隷主であるだろうから、それを防ぐべく厳罰に処するとして、そのような法を定め、実施もしたのである。

古朝鮮より後れて建てられ、それと並立した扶余にも殺人者は死刑に処し、その家族は奴隷にするとした刑法があったが、これも古朝鮮の法と同じ趣意で制定されていた。

『犯禁八条』の今日に知られている今一つの条は、他人を傷つけた者は穀物でその罪をあがない、他人の家の物を盗んだ者はその家の奴婢となるか、または大金を支払わなければならないとされていた。他人を傷つけてはならないという、その他人も主に奴隷主を念頭に入れていたと見るべきである。

世界の他の奴隷制国家における実情もみな似たようなものであり、人類の最初の階級分裂国家である奴隷制国家における被支配階級の境遇は家畜と何ら変わりがなかった。あるとすれば、ただ物を言うことができるということだけであった。

この悲惨な運命を強いられていた奴隷たちはしばしば暴動を起こして、自分たちも人間だと叫び、奴隷制社会を脅かした。彼らの暴動はそのたびに鎮圧されたが、やがて地獄のような奴隷制社会は解体され、社会は封建制へと移り始めた。

とはいえ、支配階級はそのまま生き残り、奴隷は農奴に変わって人格は認められたが、自由を束縛され、貧困から抜け出すことができなかった。

封建制社会は、身分制をもって人々を搾取し抑圧する社会であった。

支配階級の国王や封建領主はその政治的支配権を維持し世襲することで、人民をいつまでも支配し、抑圧し、搾取すべく身分制度を作り出した。身分制度は、人々を血筋により幾つかの階層に分類して、それぞれの権利と義務を定め、それを代々受け継ぐようにした。こうして、支配階級は世々富貴栄華を享受し、下層の身分の人たちはいつまで経ってもうだつが上がらないように制約された。

このような社会で人間の運命は開かれることも避けることもならぬどん底に置かれていた。身分制度は、奴隷制社会において奴隷たちを縛り付けていた鉄鎖に代わる封建的鉄鎖であった。この両者間には本質的な違いはなかった。あるとすれば、それを適用する形態と方法の違いにすぎない。

とはいえ、身分的戒律の破綻により、やがては封建制社会もその存在に終止符を打つに至ったのである。

以上のように、奴隷制社会もそのあとに現れた封建制社会も最下層の被支配階級にとっては共に勤労人民大衆の自主的要求と利益が踏みにじられる生き地獄であった。

矛盾と対立

社会は人々が無事に生き働くための必要から相互の協力関係を維持すべくして生み出された。社会が人間に特有の集まりで

あるにもかかわらず、人間は自然によって受ける災害よりも、社会からはるかに大きな被害を受けながら生きてきた。

団結と協力、相互の運命を共に開いていくことを目的にして人間が作った社会で何がゆえに矛盾と対立、衝突のような社会悪が生じたのだろうか。それがなくなるのは一体いつの日だろうか。

団結と協力にあくまでも背き、対立を事とする矛盾の歴史を解明するには、人類が社会を作り出した黎明期にさかのぼって考察するほかない。

社会の最初の段階である原始共同体社会は非常に長い期間存在した。

原始社会では、同じ氏族に属する人たちは同等の義務を担い、権利を行使した。

エンゲルス(1820～1895)は、氏族社会は実に「素朴で単純きわまる驚くべき組織」だと言った。フランスの哲学者ルソー(1712～1778)は、原始社会を理想化し、あらゆる社会悪と災厄を避ける道は自然に帰ることだと指摘していた。

私的所有制の出現は原始社会の分解を招き、個人主義を生んだ。個人主義は私的所有制の申し子である。

私的所有制とそれによって生じた個人主義に基づく社会は、必然的に相互に敵対視する階級を作り出して人間の対立と社会的不平等を生み、人民大衆に対する少数支配階級の搾取と抑圧を招いた。

私的所有制の出現により、原始社会とは根本的に異なる新た

な生活様式が生じた。

人間は生活手段と労働道具なしには生きてゆけない。その生活手段と労働道具が少数の人たちに集中するに及んで、人々の間に生存競争の原理が作用して、社会共同の利益よりも個人の利益をより重視する価値観が生じた。

他人に従属して生きるほかない人たちは、人間による人間の搾取と抑圧の最初のいけにえである奴隷に転落し、他方、彼らを支配し利益をむさぼろうとした搾取者たちは競って奴隷を所有した。

奴隷と奴隷主の出現、それは原始共同体の分解と引き続く階級分化による相互間の不平等関係が生じたこと、つまりこれまで長期間存在した共同体が階級社会に移行したことを意味した。

奴隷制国家は、被支配階級である奴隷たちを力ずくで支配し、独善的な秩序を維持すべく制定した法を駆使して、少数特権者の利益を守るための権力機構であった。

搾取階級の利益を守るための法律と国家の出現により、個人主義は搾取社会存立の隠然たる思想的基礎になり、人々の生活様式には生存競争、弱肉強食の原理が支配するに至った。

奴隷制社会に続く封建制社会、資本主義社会などでも階級的対立と不平等は止むことなく続き、被支配階級に対する少数支配階級の搾取と抑圧は、その形を変えただけでこれまた止むことなく続いた。

社会の階級分化に伴って生じた人間相互の矛盾と対立は、団

結と協力を生存方式とする人間の運命開拓の前途に立ちはだかる巨大な障害であった。

侵略と戦争、紛争、殺戮その他さまざまな性格や形態の矛盾と対立は、社会の階級分化が生じて以来、あたかもなくてはならない必然的な要素でもあるかのようにすべての社会に付きまとった。

社会的無権利にあえぐ人たちは、その不利な境遇から抜け出すことがほとんどできず、むしろ不遇のどん底へ転がり落ちていった。

矛盾と対立、不平等がもたらした最初の犠牲者は奴隷であったが、彼らはその悲惨な境遇から抜け出すべく必死に闘った。こうして奴隷制社会は崩壊して封建制社会が出現したが、支配階級と被支配階級の構図はそのまま継承され、以前の奴隷は農奴に変わっただけで、境遇が根本的に変わったわけではなかった。

社会の階級分化が生んだ奴隷とその子孫である被支配階級の境遇はいつになったら改善されるのか。

今日の世界においても対立と分裂を助長し、社会の上層に君臨して支配をいつまでもすべく全力を傾けている権力層の力は強大である。このような状況を前にして、そうした疑問を抱くのは当然だと言えよう。

しかし、対立と分裂、主観と独断は永遠に続くわけではない。

今日地球上には、階級分化を克服し、全人民が一体となり、互いに助け合い、団結と協力を遺憾なく発揮しながら前進する

真正な社会が現出しており、自主的かつ平等な立場で国際的協力を進めている国も増えつつある。世界の情勢は今なお複雑ではあるが、前途は明るい。

団結と協力

人間の喜びというものはすべて社会的関係の中で起こり、悲しみも同様である。

社会的関係がいかに結ばれているかにより、福がもたらされもすれば、災いをこうむりもする。

良心というものも、人間が集団の中で生きている場合の心の動きである。孤立して独りで生きている人間は、他人の目を気にする必要がなく、良心の呵責を覚えるようなことも、恥ずかしい思いをすることもないはずである。

人間は集団を作り、その中でわが運命を開いていく。

社会は人間の集団である。

動物とは異なり、人間は社会を作り、その中で生きているがゆえに、人間を社会的人間とか社会的存在と言っているわけである。

人間が社会を作り、その中で生きていることは明白であるにもかかわらず、その理由については見解が統一されていない。

人間が社会を作り、その中で生きているのは、単に自分の存在を保つことにあるのではなく、世界の主人として生きるためなのである。

人間は世界の中で生き、世界を改造しながら自らの運命を開いていく。世界を離れては、人間のいかなる生や運命についても考えることはできない。世界は人間の生活の場であり、運命開拓の場である。

世界の主人として生きるには、世界の全領域を改造し、人間に役立つようにすべきである。

世界の開拓は個々人が独力で成しうるものではない。人間はただ社会の中でのみ団結と協力の生存方式を実現していけるのである。

人間の歴史が数百万年を数えているにしても、宇宙の歴史に比べてみると物の数ではない。その長久の歴史の過程に生まれては消えてしまった存在は数多くあったが、人間のように力強い存在はいなかった。それは、人間がいかなる高等な存在も真似ることのできない社会という集団を作って生きてきたからである。

世界には、奇抜な着想や突然頭にひらめくインスピレーションによって新しい科学的理論を世に出したり、すばらしい発明を行ったりした人たちの実例がいろいろと知られている。けれども、それらのどれ一つとして純粋に彼一人の頭で考え出されたものはない。誰であれ社会的教育を受けて身につけた知識の蓄積があり、また社会的実践の中で得た体験の積み重ねがある。それらが新しい理論や発明の実現を下支えしているのである。つまり、人間の作り出す創造物はいずれも社会的協力によって生み出されていると言って良いのである。

人々の協力が順調になされるには、彼らの気持ちが通じ、団結が強化されなければならない。さもないと事はスムーズに運ばない。

人間の運命を開く活動においても、団結と協力を重視することが重要である。

団結だの協力だのというのをうるさがり、集団生活にそっぽを向けている人間に備わっているのはただの肉体だけであり、そのような人間はいつまで経っても人々から人間扱いをされず、自らも社会的人間としての誇りを抱けずに味気ない生活を送るほかないのである。人間としてそれほど哀れなことはないだろう。

社会の構成員の一人として生きる人間は、ただ団結と協力を自己の生存方式として生きる時にのみ、自身の運命も支障なく開いていけるのである。

他人への従属と搾取に反対し、みながみな平等な立場で団結・協力して幸せに生きようとするのは人間本来の要求である。

人間の持つ威力は、単なる個人の知恵や力にあるのではない。緊密な社会的連帯を成し、力を合わせて生きるところに、人間の優秀性があるのである。

人間が運命の歴史的道程を力強く切り開いてきた秘訣は、団結し協力したことにある。

志を同じくし、力を合わせればいかなる困難にも打ち克ち、目指す目標を極めうるということが、歴史が教えた真理である。

チュチェ思想の具現された朝鮮では、社会のすべての構成員が、「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」というスローガンの下、互いに信頼し、団結し、助け合い、導き合いながら、社会と集団のために、国の富強・繁栄を目指して自分たちのすべてを尽くしている。

今国の至る所で見られる人々の心温まる美風は、朝鮮人民の気高い思想精神世界と社会の人間関係の高まりの様相を如実に見せている。

今日、朝鮮人民があらゆる挑戦と難関を果敢に乗り越え、国家の隆盛と発展の新しい歴史を作っていくのは、団結と協力が社会関係の基本を成しているからである。

人々が団結し協力して生きる強みを大きく生かしていくところに、運命開拓の秘訣があるのである。

人間は自己の運命の主人である

　これまで人間は、自分たちの運命は外部の何らかの力によって決定される宿命だと見なし、望もうが望むまいが、強いられる運命のコースを歩んで生きたのである。

　しかし、外部から強いられた運命はどうにもならないとしてあきらめ、屈従の人生を送るのは間違いである。人間は自己の運命をわが意思によって明るく開いていけるということを知るべきである。

　人間は自己の運命の主人である。

　これは、不遇な生を強いられた過去の人間の運命の歴史にピリオドを打った歴史的な宣言である。

人間はいかなる存在なのか

人間はいかなる存在かという哲学的な問題は、人間が他の存在と区別される本質的な特性は何であるかを問う問題であり、ひいては人間が自己の運命の主人になる理由は何かという問いに答える問題である。

人間がその運命を開いていく過程は、自らの本性的な要求を実現していく過程である。

それゆえに、人間の本性とは何かという解釈のいかんにより、人間はそれぞれわが運命の目的と開拓の方向を定め、その実現方途を考えることになるのである。

歴史の中に見られる多様な運命の基底には、人間の本性についてのそれぞれの見解が置かれており、その数に応じた互いに相違なる運命の枝道が出来上がったのである。

人間の本性にかかわる問題は、各人の運命と結びつく深刻な問題であるために、歴史上古今東西の哲学者や思想家、芸術家、劇作家、神学者などがこの問題の正確な解答を得るべく、大きな力を傾けたのであった。

人間が経験した運命のすべての悲劇は、自分を知らなかったゆえに招いたものである。

人間に関する問題はさまざまな哲学者によって論じられたが、そのほとんどは社会的関係を考慮しない単なる人間そのものにのみ焦点が当てられた抽象的な見解にとどまっていた。

これまで数千数万の人たちがそれぞれ、人間とは何かという問題について考え、論議したのであるから、それらの見解も多様であった。

ここではその幾つかについて見てみることにする。

自然と人間によって作られた事物を区別せず、すべての物を一律に自然と見なしていた古代の人たちは、人間も自然の一部であるとして、自然と区別して考えようとはしなかった。つまり彼らは自然と社会、人間を区別して見る現代の人たちとは見解を異にしていた。だから彼らは、人間の本性を解明しようともしなかったのである。

では、中世に至って人々は人間をなんと見るようになったのだろうか。

東西の違いがあり、国によってもまちまちの見解があったが、当時の人たちの考え方はおおむね非科学的であった。彼らの見解に通底している見解は、人間は神によって作られたというものである。

中世にも人間の出現を科学的に究明しようという試みがなかったわけではないが、当代の未熟な科学のレベルでは、正確な解明は無理と言うほかなかった。

科学が一定の進歩を遂げた近世に至り、人間とはいかなる存在かという問題の解答を人間そのものから引き出そうとする試みがいろいろとなされるようになった。

ある人たちは、人間を自然の一つの産物であるとして、人間は自然の一存在、生物学的存在だとし、人間の本性について

も、「労働する存在」、「考える存在」、「言語を持つ存在」などと定義し、中には人間を「孤独な存在」だの「死へ向かう途上にある存在」だのと言い出すニヒリスティックな考え方を公言する人たちも現れた。

以上見てみたように長い間、人間は己がいかなる存在であるかに気づかずに生きてきたのである。

この問題を解明したのは、金日成主席の創始になるチュチェ哲学であった。

チュチェ哲学は、人間は自主性、創造性、意識性を持つ社会的存在であると定義した。

ここで強調したいことは、この人間の本質的特性は人間が社会的存在であるという点に基づいて定義されたことである。

社会的存在とは、社会的関係を結び、その集団の中で生き、活動する存在だということである。世界の中で社会的な存在はひとり人間のみである。人間だけが社会的に結びついて生きているのである。

自然的存在とは異なり、人間の本質的特性は、人間が社会的関係を結び、社会的集団の中で生きていく中で形づくられ、発展するのである。

人間は自主性を備えた存在、自主的な社会的存在である。

自主性は世界と自己の運命の主人として自主的に生き、発展しようとする社会的人間の属性である。

自主性をその属性としているがゆえに、人間は自然の拘束を

克服し、社会における一切の従属を振り切り、すべての物を自分に奉仕するように作っていく。

すぐる歴史が示しているように、人間は外部勢力に従属して生きようとするのではなく、世界の主人、自己の運命の主人として生きようとしてきた。これは他のいかなる動物にも見られない人間特有の性質である。自然の環境に順応し、それに慣らされながら生きるのは生物学的存在の生存方式である。適者生存の法則に従い環境に適応しうる動物は生き残るが、そうはならない動物は死滅するほかない。そのことを実証しているのは、一時大いに栄えた恐竜の絶滅である。

しかし、人間は自分たちに対するいかなる拘束や従属の強要に負けるのではなく、それらを排し、克服していく。

人間に対する人間の従属や拘束は、人々にとって耐えがたい屈辱であり、羞恥である。この世にみんな同じように生を受けて享受すべき人間の権利が踏みにじられるなら、そこにいかなる社会的平等がありうるだろうか。人間は社会的不平等に反対し、自由に生きることを切望している。

奴隷制に抗する奴隷たちの闘い、封建制に立ち向かう農奴たちの闘い、植民地支配をくつがえすための植民地人民の闘いなどは、人間が外部から強要された社会的境遇に順応して生きる存在ではなく、社会的関係を自分たちの自主的要求に即して作り変えて生きようとする存在だということを語っている。

人間は創造性を備えた存在、創造的な社会的存在である。

創造性は目的意識的に世界を改造し、自己の運命を開いていく社会的人間の属性である。

創造性を備えているがゆえに人間は、古いものを変革し新しいものを作り出しながら、自然と社会を自分たちの生活に有利なものに改造していくのである。

人類学で人間と動物の間のボーダーラインがいかに引かれたかを振り返ってみよう。

人間と動物の境界をいかに定めるかにより、人類がいつ出現し、その歴史発端の時点がいつであったかが定まるのである。

人間と動物との間のボーダーラインをどこに定めるかについての見解相違がいかに大きかったかは、第7回人類学国際セミナーに「人間と動物のボーダーライン」というテーマが上程されたということからしても推定されるが、それはともかく、彼らの間で合意のなされた点は、両者の境界を石器によって定めることにしたことである。

つまり、石器と共に存在した化石は間違いなく、人間の骨であり、石器の出土した遺跡は人間が残したものだから、人間と動物を区別する上での手がかりを石器に求めるべきだと落着したのであった。石器は人間によって作り出された最初の生産道具である。

このことからも理解しうるように、人間にはいかなる自然的存在も成しえない新しい物を作る能力、つまり創造性を備えているのである。

もちろん動物もそれらの巣を巧妙に作りはしているが、単に

それにとどまり頭を使って何かを作るような能力はない。

ところが人間の場合は、境遇の変化によっても、また歳月の流れの中でも新しい物を作り出す才能、つまり創造的能力を備えているのである。

このように人間は、古い物を新しい物に作り変えながら自然と社会を自分たちの生活にますます有利に作り上げていく創造性を備えているがゆえに、いかなる環境の変化の中でも生きながらえ、発展していくのである。

人間は意識性を備えた存在、意識的な社会的存在である。

意識性は世界と自分自身を把握し、作り変えていくすべての活動を規制する社会的人間の属性である。

意識性を備えているがゆえに人間は世界とその運動法則を把握して、自然と社会を自分たちの必要に応じて作り変え、発展させていくのである。

意識性は、世界と自分自身を把握する活動を調整し統制する。

意識性を備えているがゆえに人間は、世界万物の秘密を解き、必要な情報を集め分析して、現象の奥にある本質を見極めることで、自分自身の現況を知り、正誤を判別し、何が有益であり、何が有害であるかを判断する。

意識性は、世界と自分自身を作り変える活動の調整も行う。

意識性を備えている人間は、環境を作り変え、自分自身を発展させていく実践活動の対象を選び、目標を定め、その上で具体的な行動を策定し、わが力を調節しながら目標に向かって進み、立ちはだかる障害を乗り越えていく。

このように、意識の規制的作用の下で自主的かつ創造的な活動を行う人間の本質的特性が意識性である。

自主性と創造性、意識性を備えているがゆえに、人間は世界で最もすぐれた有力な存在になりえたのである。

ところで、これら自主性、創造性、意識性は天賦の属性でないことを知るべきである。

それらは社会が進歩し、歴史が流れていく中で生まれ、発展してきた社会的属性である。

それは、生後いかなる家庭的環境の中で教育を受け、ひいては学校教育、社会的教育をどのように受け、彼を取り巻く環境がどうであるかによって左右され、特に本人の意識的努力のいかんにより人々の持つ属性に相違が生じるのである。

自主性、創造性、意識性が社会的属性であるというのは、社会が生まれてから今日に至るまで、そのレベルが不断に高まり、強められてきたことにも表現されている。

人類が文明の世界に足を踏み入れた時から今日に至るまで、人間の肉体構造と生物学的特性には別して大きな違いは生じなかったが、自主性、創造性、意識性のレベルには格段の相違が生じている。これは、人類が久しい歴史の流れの中で共に力を合わせ努力した結果身につけ、伸ばしてきた貴重な人間の属性である。

人間の貴重な属性であるこの自主性、創造性、意識性の発見は、人間が自分自身を知らずに生きてきた久しい歴史にピリオドを打った。

運命の舵を取り運命の櫓を漕ぐ

チュチェ哲学は世界と人間の関係問題、世界における人間の地位と役割に関する問題を哲学の根本的問題として新たに設定し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を闡明し、それに基づいて人間の運命開拓の道を明らかにした。

自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開く力も自分自身にあるということは、チュチェ哲学が明らかにした人間の運命開拓の根本的な命題である。この命題は、人間がわが運命を開くためには何をどのようにすべきかを集約的に教えている。

人間と環境の相互関係の中における運命についての思索は、人間の哲学的思考が始まった時から歴史の流れの中で止むことなく続けられた。

自主性、創造性、意識性のレベルが低かったせいで、環境に対する能動的な作用が明確に認識できなかった状況の中で、以前の人たちは、環境に期待をかけて運命開拓の道を模索した。

その代表的な理論の一つは、地理的決定論である。

この理論の骨子は、領土の大きさ、気候、土壌のような自然の環境が人々の意識や社会制度を決定するということである。

しかし、歴史はこの理論を退けた。

環境は自ら人間に幸運を提供するようなことはしなかった

し、とりわけ社会的環境は人間にあまりに非情であり、酷薄であった。

人間は、必要な条件と環境を設計し、それを実地に実現すべく、能動的な活動と役割をもってわが運命を開いていくほかなかった。

帆を上げた船が予定の航路を正確に進むためには、船の舵をきちんと取ることである。さもないと船は航路をはずれて迷走し、あげくの果ては難破である。

運命の帆を上げ、舵を取るのは人間である。このことをチュチェ哲学は、人間は自己の運命の主人であると表現している。

人々の日常生活では、主人という言葉はいろいろな意味で使われているが、多様な哲学的概念としての主人は、人間とそれを取り巻く世界との相互関係の中で人間が占めている地位を表現した概念である。

人間は自らの利害関係を前提にして運命の方向を決め、その道を設計し、決心を下す。この決心は、自分の境遇や環境を無視して主観的に下されるべきではない。

人間の思考は、具体的な生活境遇と周囲の環境に気を配りながら進められるのであって、浅薄な思考をもって無分別に決心し行動に移ると必ずや失敗の憂き目を見ることになるであろう。

ともあれ、自らの運命を開くことを思い立ち、決心を下すのは、当の人間である。

人間はあくまでも自分自身の力で自らの運命を切り開いてい

くべきである。問題は運命の開拓をいかに進めるべきかということにある。

人間の運命開拓の鍵は、自分の掌中にあるとはっきり認識して高度の責任感および確固とした決心、覚悟を抱き、明るい未来に向け、確信を持って舵を取ることである。そうすれば、環境やさまざまの不利な条件も自分たちに有利に作り変えて進むことができ、運命開拓の目標は達成されるのである。

出航した船が順調に航海するには、舵を正しく取ることに劣らず、櫓の漕ぎ手たちの役割も重要である。

ここで言う漕ぎ手とは、運命の開拓を目指して闘う人間自身である。

このことを哲学的に表現すれば、人間の運命の開拓で決定的な役割を果たすのは人間自身であるということである。つまり、人間の運命の開拓ではそこにさまざまの要因が作用するが、ここで決定的な役割を果たすのはあくまでも人間自身である。

もちろん人間を取り巻く環境の力は人間の生活に大きな力を及ぼしており、そのことは誰も否定できないであろう。

なかんずく長い歴史の流れの中で形成された人間の社会的関係や物資的・文化的財物などの社会的要因は、人間の運命の開拓に無視しえない影響を及ぼす。

とはいえ、人間の運命の開拓ではその担い手の役割が決定的に作用するのである。人間の集団的な力は巨大であり、その力を阻む力はこの世にない。人間の力は単なる物理的な力ではない。人間の肉体的な力そのものは取るに足りないが、今人間は

地球の重力の場を抜け出して宇宙を飛んでおり、地上でもめざましい建設を行い、生活環境を改善している。

人間は自分たちの運命を改善するのに必要な物はどこにあり、いかなる条件を作り出せばそれら巨大な力を利用しうるかを考え、設計し、実現に向けて着々と前進している。

人類はその発生と共に打製石器を作り、今では最先端を行く機械・技術手段を作り出すに至っているが、そこには人間の知恵と力がこもっているのである。

人間が作ったいかなる社会的関係や物質・文化財もすべて彼らの運命を切り開く闘いの中で生み出されたものであり、人間によって利用される手段に過ぎない。

このように人間は生活に必要な一切の物、条件を自分たち自身の力で作り出しているのである。

自然の力がいかに大きくても、人間の力と結びつかずには人間の運命の開拓にはなんの役にも立たないのである。

運命開拓の決定的要因はあくまでも人間の力にあることを肝に銘じて、集団の全構成員は自らの運命の開拓のために力を合わせて闘わなければならない。

世界観と人間の運命問題

人間の運命は世界との関わりの中で開拓されていくのであるから、人間が世界の一切の事物と現象の秘密を解明し、それらを巧みに利用しながら運命を切り開いていくためには、正しい世界観を持つべきである。

人々は、その生活の境遇や利害関係の相違によりそれぞれ世界を見る目を異にし、したがってそれに対応する仕方にも違いが生じる。こうして見ると、世界観は世界についての単なる知識ではなくて思想だと言える。

人類史上に見られた世界観の中には、人間の運命に肯定的に作用したものもあれば、否定的に作用したものもある。

正しい世界観を持てば、そのような人たちは自己の運命の前途を楽観するようになるのである。

世界に対する従前の見解

世界観は長い歴史の流れの中で発展を続けてきた。

それらの世界観の中で論題の焦点をなしたのは、人間を含む世界のすべての事物や現象を一言でいかに特徴づければよいかということであった。

この問題では、意見が大きく二つに分かれていた。

一方では、多様な事物の特徴はそれ自体の原因に根ざしているとし、他方では、観念、意識によってすべての事物現象が特徴づけられるとしていた。

この二つの主張の対立は、人間が自分の境遇の根源が何かある現実の中にあるのか、それとも精神的なものにあるのかという人間の運命問題にかかわる対立であった。

世界観のこの対立は数千年の歳月の流れを経たのち、唯物弁証法的世界観の登場により、理論的に一段落ついた。

世界の中で生きる人間の運命は、正しい世界観を持たずにはまっとうに開かれていけないにもかかわらず、人間は最初から世界万物の根本的な成り立ちを把握していたのではなかった。

人類の発生初期、その生活領域はごく限られ、生活の経験も極めて単純であった。しかしながら人間は周囲の環境と絶えず接触し、それらを必要としていたので、幼稚で幻想的ではあっても世界についての表象を描き見るようになった。

原始社会が崩壊し、人間の実践経験が積み重ねられ、人々の

社会的なつながりが強まり広まるにつれて、世界に対するそれまでの単純な狭い表象は、やがて理論的に体系化された世界観へと高まっていった。

従来の哲学的世界観において論議された根本的な問題は、世界の始原に関する問題であった。問題の焦点は物質と意識のうちのどちらが第一次的かということであった。つまり物質がまず存在し、そこから意識が生じたのか、それとも意識が先に存在し、それにより物質が作り出されたのかという問題であった。

人々は、一定した形と大きさを持つ多様な事物を絶えず目にし、複雑な精神現象を体験しもした。こうして、両者のうちのどちらを規定的な基礎とすべきかということが重要な哲学的問題として持ち上がったのである。

世界は本質上物質であり、物質により統一されているとする見解は、多様かつ複雑な事物現象は、人々がいかなる目でどう見ようが、客観的に存在しており、それらが人間の感覚器官を通して頭の中へ入ってくると意識になると主張する。つまり、物質が第一次的であり、意識は第二次的だとしていたのである。

物質の第一次性を認める人たちは、世界の万物に神秘な点はない、それらはそれぞれそれ自体として存在しているにすぎない、だから世界のいかなるものをも幻想的に見るべきではないと主張している。

他方、世界は観念の世界であると見る見解は、事物現象の

特性は、観念、精神によって規制されると主張している。つまり、精神・意識が第一次的で物質は第二次的だということである。

物質が第一次か、意識が第一次かという問題、世界の始原問題をもって始まった世界に対する探究は、世界についての原始的な表象が人々の実践的経験の蓄積と認識能力の向上、社会的・階級的境遇などと結びついて理論的形態を備えるに至り、それは同時に、人間の運命が理論的な思考方式と道理に沿う生活態度によって規定されるようになったということを意味した。

世界の始原問題をもって進められた世界に対する哲学的探究は人間の運命と結びついて、長くも苦難に満ちた学術上の論争と厳しい闘争を同伴した。

世界の始原問題は、世界が何によって出来ているかという哲学的問題であると同時に、社会的特権とか無権利なるものがある何かにより定められているのか、それとも社会的な産物かという深刻な社会的・政治的問題でもあり、それは唯物論と観念論の世界観的な対立と闘争を生んだ。

この対立ではどちらも譲歩しようとせず、長い歳月止むことなく続いた。

唯物論と観念論の論戦は他方、世界がいかに変化・発展するかという問題をめぐって互いに相反する弁証法と形而上学との間の闘争と密接に結びついて行われた。

この問題が深刻な対立の焦点となったのは、世界がいかに変

化・発展するかという問題が人間の運命問題と結びつき、運命は宿命かそれとも変化しうるのかという問題との関わりの中で持ち上がったからであった。

弁証法は世界のすべての事物は互いに関わり合い、その中で変化・発展すると主張し、形而上学は事物現象はすべて孤立して存在し、固定不変だと主張した。

一言で言って唯物論と観念論の論争は、世界が根源的には物質かそれとも精神かという世界の始原問題をめぐる論争であり、弁証法と形而上学の論争は、人間を含む万物の関わり合いとその運動・変化のいかんをめぐる論争であった。

古代の唯物論者は、日常の生活でよく見かける具体的な事物現象をもって世界を説明した。彼らは水、火、空気、土などがいろいろと変化して世界の多種多様な事物現象を形成したと主張した。彼らは意識も空気とか何らかの微粒子と同じようなものだと考えた。しかし、そのような見解は科学的な裏づけに欠け、日常の経験や直観に基づく素朴な自然発生的な主張にとどまっていた。

これら古代の唯物論と弁証法は直観的で幼稚なものではあったが、そこには、人間の運命を神秘視する必要がなく、変えることができないというのも間違いだとする主張がこもっていた。

中世においても唯物論と弁証法は、観念論と形而上学との闘争を続けつつ成長した。

ヨーロッパの哲学者たちは概して客観的世界の一般的な特性

を、主として自然の現象をもって説明したが、東方の哲学者は主に社会的・政治的問題を扱った。特に、近代には腐敗した無能な封建支配層を対象とする闘いが前面に押し出されて、国を改革し、人々の自主権を守ることを主張する社会・政治思想が基本的な思想潮流をなして登場した。

近代の唯物論は、生活の経験や仮定、予測などに依拠していた古代の唯物論とは異なり、自然科学の成果を踏まえ、人間を含めて世界は物質からなり、世界を支配するいかなる超自然的な、神秘な存在はないと主張した。

唯物論と観念論、弁証法と形而上学の歴史的な論争は、マルクス哲学の出現により、唯物論と弁証法の勝利が理論的に確定された。

マルクス主義の創始者たちは、それまでの唯物論と弁証法の合理的内容を批判的に取り入れ、結び合わせることで、唯物弁証法を定立したのであった。

唯物弁証法は、世界の物質性とその変化・発展の一般的な合法則性を明らかにした哲学である。

人間を中心に据えて見た世界

数十億年を超える地球の長くも長い存在と変化の中で生命物質が発生し、やがては高等な動植物が現れ、その動物の一種が進化して人間という特異な存在が出現した。

人間と人間を取り巻く世界の事物はそれぞれに固有の変化・

発展の法則に従って相互に作用し合っている。しかし、人間以外の事物現象の変化・発展や相互作用は意識的なものではなく、自然発生的になされているのである。

ところが人類の出現により、人間とそれを取り巻く事物現象との間には、従来とは異なる新しい関係が生まれた。この新しい関係こそは、今日の世界の様相を見せる基本的な特徴である。この新しい関係、それは人間と周囲世界との間の相関関係である。

人間の出現により、人間と世界との間には支配と被支配、改造という従前には見られなかった現象が生じたのである。例えば、人間の支配下に置かれた鉱山の鉄鉱石は、人間の手で掘り出されて鉄に作り変えられるのである。

世界が人間の支配下に置かれ、改造されるというところに、人間と周囲世界との間に成立する特異な関係がある。

周囲の世界に対する人間の支配・改造という関係は、世界の変化・発展の様相がどのようなものであるかを見せる根本的な尺度である。

もっとも、世界が人間によって支配され改造されるということは、世界のすべての物が人間の支配下にあり、何もかもが人間の手で改造されるということではない。

人間の利益という立場から見て、周りの環境がすべて人間に有利であれば、わざわざそれらを作り変える必要はない。

しかし現実はそうではない。人間に不利な環境はいくらでもある。昨日は便利だったものが今日は時代遅れとなり、明日は

新しい物と取り替えなければならないのが人間の生活である。

平和の破壊者たちがこの世界に存在して、公平を欠く国際秩序が幅を利かせており、人間の生存を脅かす自然の災害もある。改造すべき対象は実に多いのである。

けれども人間はしり込みせず、不利な、あるいは必要のない周りの環境をうまずたゆまず作り変えていく。

世界にある自然の状態に手を加えなくてもそのまま利用できる対象はごく限られており、大多数は改造して利用しなければならず、そのためには千変万化する世界の運動法則を把握していなければならない。

世界の多様な運動法則を知り、利用するのは、人間の積極的な働きかけによってなされる人間と世界との関係の最初の結びつきである。

人間は世界の本質と運動法則を知ることにより、その支配と改造の方法を把握し、有効に世界を作り変えていくのである。

周囲世界の事物現象の運動・変化は人間に有利になされるものもあれば、そうでないものもある。自然の同じような運動・変化も時には人間に有利に、時には不利に作用する。同じく降る雨も田植えの頃には農民に歓迎され、取り入れの時には嫌がられるのである。

人間は自分たちが有利な事物現象の運動・変化であっても、それをより有効に利用しうるよう工夫もする。

このように世界の本質に加えてその運動・変化の法則を把握することにより、人間は自己の運命の開拓も順調に進めていく

ことができるのである。

チュチェ哲学は、世界の本質に加えて、人間を中心にして世界の支配と改造の合法則性を明らかにした。

自然と社会の発展は本質上、世界の支配者、改造者である人間によってなされる変革過程である。

長い歴史の流れの中で、世界の変化・発展問題をめぐる弁証法と形而上学の闘争を通して、世界は全般的に連関しており、不断に変化・発展しているとする弁証法の勝利が確定したが、世界がいかなる要因により、どの方向にいかなる速さで発展しているかについての科学的な解答はなされていなかった。

今日の世界の発展の実状を正確に理解するには、そこに作用する要因がいかなるものであるかを知らなければならない。

世界に存在する事物現象は、人間に仕える可能性を内包しているが、それはあくまでも可能性であって、現実そのものではない。それが実現するには、人間の積極的な働きかけがなければならない。

世界の発展の要因は人間の積極的な活動であり、世界は人間の積極的な働きかけによってのみ人間のための世界に作り変えられていくのである。

世界の発展過程つまり世界が人間によって支配され、改造されていく過程には、人間のみならず自然地理的条件や社会的環境のような客観的要因も作用する。これは、世界の支配と改造に向けた人間の活動が一定の自然地理的条件と社会的条件およびその環境の中で進められるからである。

世界の発展に影響を及ぼす要因には、自然地理的条件と社会的環境、それに物質的・技術的手段などがある。

有利な自然地理的位置や温和な気候、肥沃な土壌、豊かな資源などはそのままで人間の利用しうる条件である。

社会制度はその性格のいかんによって、自然と社会を支配し改造する人間の活動が抑制されもすれば、逆に積極的に推し進められもする。

今日の世界は人間にいよいよ深く仕える方向へと進んでいる。世界が人間に仕える方向に変わりつつあることは、今日の世界の発展傾向が肯定的であることを示している。

もちろん世界は人間に仕えることを前提にして生まれたのではない。世界は自ら進んで人間に仕えているわけではない。人間が出現する以前の世界は、不断に運動する物質的存在相互の作用の中でのみ変化し発展した。そうした中で世界の事物は徐々に進化して無機物が有機物になり、それはさらに生命へと進化し、遂に人間が世界に出現したのである。

人間以外の生命体は環境に順応できないと死滅するほかない。

ところが、人間は単に与えられた環境に順応することによって生きているのではない。

人間は世界と自分自身をより広い範囲でより効果的に出来る限り早く把握すべく努力し、より新しい有益な物質・文化財をより多く、よりたやすく、より上質に作りながら利用している。

今日人間による自然の改造は、最新の科学と先端技術により、以前は夢想だにしなかった広い領域で急速に進んでいる。こうして今や、自然のますます広い領域が人間の要求を実現すべく利用されているのである。

社会も人間の自主性を実現する方向、人間に役立つ方向へと作り変えられつつある。

もっとも、社会的環境のすべてが人間の発展に有利に作られているのではない。

すぐる歴史的時代には、社会的不平等を維持し、人間の健全な発展を抑制する不合理な社会が長らく存在した。とはいえ、一切の特権と不平等に抗し、人間の自主性を守るための広範な大衆の闘いにより、社会は人間の本性である自主性を守る方向へと進んできた。

時間の流れと共に世界に対する人間の支配と改造の領域は引き続き広がり、人間により多く仕える方向へと世界は急速度で変化していくであろう。

このような急速な進歩は、機械・技術手段の革新にもそのまま現れていくであろう。

人類の最初の労働道具石器の出現から鉄器が現れるまでには数十万年の歳月を必要とし、ひき臼から蒸気機関への移行も数千年を要した。ところが、生産の機械化がオートメ化へと進むにはわずか数十年しかかからなかった。20世紀初に飛行機が作られたが、その50余年後には人工衛星が、引き続き宇宙飛行船が出現した。科学の世界においても20世紀初めに研究の始まった

原子物理学や高分子有機化学が急速に発展し、今日に至っては電子工学、情報技術、レーザー工学、細胞工学、遺伝子工学などがめざましい進歩を遂げている。

世界は人間の支配を受け、人間の力により改造されるということ、これはチュチェ哲学によって解明された、世界における人間の位置と役割が解明された人間中心の世界観である。

世界に対する観点と立場

人間は世界についての正しい見解を抱き、その上で世界にいかなる態度で臨むべきかを認識すべきである。これがほかならぬ世界に対する観点と立場、つまり哲学的方法論である。

人間の運命を開いていく中で遭遇する困難を克服し、運命を支障なく開いていくためには、そこに正しい方法論がなければならない。

多様な環境と条件の下でさまざまに繰り広げられる人間の活動の成功いかんは、正しい知識と正確な方法論に基礎を置いているか否かによって決まると言ってよい。働きかける対象と自らの準備程度についての正確な判断に基づき、科学的な方法論を適用するならば、目的は首尾よく達成されるのである。

人間を中心にして世界に対処するということは、世界の主人である人間の利益を踏まえて世界に対処するということである。

世界で最も貴重な存在は人間であり、その活動は究極のとこ

ろ人間自身のためになされるのである。人間の活動の目的は己の利益をはかることにあり、目的の達成はそれに適した手段を用いてなされるので、人間はその手段を大切にするのである。

発電所は電気を生産する手段であり、電気は機械の運転や農業に必要な手段であり、その電気をもって作られた物品や農産物もまた人間の生産活動や暮らしに必要な手段である。つまりそれらの手段はいかに重要であれ、あくまでも人間の生活を支えるために存在するのであって、人間の上に置かれる対象ではない。

人間の利益に原点を置いて世界を見る立場には二通りの内容が含まれている。

その一つは、人間の自主的な要求と利益を踏まえた上で、すべての事物現象の価値を分析し、評価することである。この場合は、それらの事物現象が人間にとって有益か有害か、有益ならばその価値はどれほどかを知って評価すべきである。

原始社会の石器と現今の機械の価値は、それぞれ何を基準にして評価されるべきかということであるが、いずれにしろ、それらが人間にとってどれほど有益かということを目安にして決められるべきである。さもないと、石器と機械の違いは、それらの材質と構造および形態上の違いによって評価されるだろうから、両者を比較しても何ら意味はない。

石器に比べて機械がはるかにすぐれているのは、それが人間に非常に大きく役立つからである。

人間の利益に原点を置いて世界を見る今一つの立場は、すべ

ての人間の活動において、人間の自主的権利と利益を守ることを最高の原則とすべきだということである。

周知のように、人類の福利を目的にして開発された核エネルギーは今、人類に思いもよらぬ大きな脅威と災厄ももたらしている。

製品を生産し、工場を建設しても、人間の自主的要求と利益に合致する方向・原則で具現されなければならない。もし、それらが人間の尊厳を踏みにじり、生命を脅かすものであるならば、そこになんの存在価値があろうか。

人間の活動に立脚して世界の変化・発展に対応するということは、世界の改造者である人間の能動的役割に基づいて世界の変化・発展に対応するということである。

世界の改造にあたって、客観的要因の作用を無視したり過小評価すべきではない。

世界の改造ではさまざまの物質的手段が投入されることになるが、人間の認識と活動が深まるにつれて、それら物質的手段の役割は不断に高まっていく。自然の秘密を解く自然科学分野でいろいろと複雑な実験設備が利用されていることはその一つの実例である。

自然の改造にも物質的手段が大量に投入されてはいるが、そのことをもって人間が世界を認識し改造する活動において、人間よりも物質的手段の方がより大きな役割を果たしているとするのは誤りである。それら物質的手段がここで果たす役割は無視できないほど大きいが、この事業で果たす決定的要因はあく

までも人間の活動である。いかにすぐれた物質的手段であっても、それらは決して人間の活動を代行することはできない。

今日の世界で人間の生活と密接に結びついているコンピューターにしても、人間不在では何事もなしえないのである。

つまるところ、世界の改造で決定的な役割を果たすのは人間である。

これまで世界でなされたすべての変革には、人間の巨大な努力と汗がこもっている。

世界は今後も続く人間の決定的な役割により、止むことなく変化し発展していくであろう。

先にも述べたように、人間の創造的な力は持って生まれたものではない。人間は常時教育を受け、謙虚に学び、実践活動の中でいろいろな経験を重ねていく中で創造的な活動を行っていけるようになり、運命問題を解決する上でも、そこで持ち上がる膨大かつ複雑な問題を成功裏に解決していけるのである。

それゆえ、人間の活動を基本にして世界の変化・発展を促すには、人々の創造的な力を養い、世界を認識し改造する上で持ち上がるすべての問題を人々の創造的な力を高める方向で解決していくべきである。

1950年代初の朝鮮戦争で朝鮮全土が廃墟と化したが、戦後、人民が短期間内に徒手空拳で復興建設を成し遂げることができたのは、人民の力に信を置き、人民の中に入って彼らの力を結集した金日成主席の指導のたまものであった。

主席は降仙製鋼所を訪れて、鋼材1万トンがもっとあれば国

が一息つけると労働者たちに呼びかけ、これに呼応した降仙の労働者たちは、元来公称能力6万トンの分塊圧延機で9万トンをきっと生産するとして計画を大胆に立て直した。ところが彼らは生産実践の中で創造的な力を大いに発揮し、その圧延機をもって驚くなかれ12万トンの鋼材を生産したのであった。

主席が降仙の労働者たちに呼びかけて上げた革新の火の手はたちまちにして全国に広がり、全朝鮮人民がこぞって参加するチョンリマ(千里馬)運動が始まったのである。

こうした大高揚の中で朝鮮で初めてトラクターの生産が始まり、引き続きトラックが作られ、掘削機その他の重機械も作り出されるようになった。

チョンリマ運動の中で朝鮮人民は第1次5カ年計画を成功裏に遂行し、社会主義工業化の基礎を強固に築いたのである。

この朝鮮の経験からしても、世界を認識し改造する活動で果たす決定的な要因は人間の力であり、その力に依拠するならば不可能なことはないというのが、朝鮮革命の歴史を通して確認された真理である。

歴史の主体と運命の開拓

歴史の主体とは、歴史を作り発展させていく担い手であり、具体的に言えばそれは人民大衆である。

人間は人民大衆の一員となって生きる場合にのみ歴史を作り発展させ、自らの運命を開いていけるのである。

社会の歩みと共に連綿と切り開かれてきた人間のすべての運命には、歴史の主体である人民大衆と喜びも苦しみも分かち合いながら歩んだ人たちの久しい闘争の足跡が残されている。

とはいえ、その歴史の道を人民大衆は目的意識的に坦々と歩んできたのではない。

現時代に至って出現したチュチェ哲学により、社会と歴史を人民大衆を中心にして考察し、対応する観点と立場が確立し、それに基づいて歴史発展の合法則性も明らかにされたのである。

人民大衆は最も有力な存在

人民大衆は階級社会においては階級的性格を帯びた存在である。

階級社会では、生産手段と国家権力の掌握いかんにより、支配階級と被支配階級の差異が生じる。ここでは社会の絶対多数を占める被支配階級に属し、搾取を受けて暮らす人たちの集団が人民大衆の基本をなすのである。

社会主義社会においては、すべての住民が社会主義的勤労者になり、社会の全構成員が人民大衆に属することになるが、そこにはさまざまの階級や階層の人たちが含まれている。

人々の思想や行動は、社会的・階級的境遇によってのみ決まるのではない。彼が進歩的思想を抱けばその出身はどうであれ、人民大衆の側について生きるようになる。

人民大衆は、世界と自分自身の運命の主人として生き、発展することを志向している。そのような志向は、歴史の発展と共に不断にレベルが高まり、そのような中で人民大衆の階級的構成も変化してきたのである。

奴隷制社会では奴隷の境遇から抜け出そうとする階級や階層の人たちが人民大衆の基本をなしたが、封建制社会では封建的桎梏から脱そうとする階級や階層の人たちが人民大衆の基本をなした。

それが今日では、人間の自主的要求を実現するための闘い

が世界的範囲に広がり、広範な層の人民大衆がこれに参加している。

自国、自民族を愛し、人間性を重んずる人なら誰であれ人民の側に立って闘い、人民大衆の一員として生きることができる。

人民は長い歳月歴史の発展に大きく寄与してきながらも社会的冷遇に甘んじて生きた。搾取階級は、人民が受けてしかるべき当然の社会的権利を力をもって抑えつけ、彼らの膏血を絞りながらわが腹を肥やしてきた。

人民は無尽の力と知恵の所有者であり、勤勉な労働によって社会の富を増やしていく存在である。

人民という言葉には創造と変革、奇跡の歴史がこもっている。

創造的な活動によって社会の発展を推し進めていく人たちはすべて人民の一員である。そうした意味で人民とは働く人たちを指す言葉なのである。世界のすべての貴重な、美しい物はみな人民の力で作られている。正義や人間の良心、民族の美風良俗、歴史的な民族文化財などのどれもが人民の手で生み出されたのである。

普通一般に発明・発見なるものは個人の名と結びつけて語られてはいるが、前述したように、その基底にあるのは、社会的に生きる人民によって積み上げられた知識である。

進歩的な芸術の素材も人民の中にあるのである。

自主精神と勤労精神、無尽の力によって歴史を作っていく

人民大衆の力により、人間の貴い精神と息づかい、知恵のこもる、すぐれて美しい事物が無数に創造されたのである。

人民大衆は世界と自己の運命の主人となり、自主性を貫くべく創造的活動を行う。

人民大衆はいつどの時代においても自主を志向し、自主性を実現する闘いを通じて歴史を開いてきた。

働く人たちを基本とし、自主的な要求と創造的活動の共通性によって結びついた人たちの社会的集団が、ほかならぬ人民大衆である。

人民は歴史を作る主体であるがゆえに、歴史の発展は当然人民大衆を中心に置いて見る立場に徹しなければならない。

人民大衆を中心にして歴史に対応する観点と立場の確立、これは社会的、歴史的に不断に発展してきた人間の運命を開く闘いにおける偉大な転換である。

金日成主席は革命闘争に乗り出した初期から、人民を天のように見なす以民為天の思想を座右の銘として人民の中へ入り、彼らの力に依拠してすべての問題を解決してきた。

1994年4月、米国CNNテレビ記者団が主席の接見を受けた際、彼らは、「あなたの趣味はなんでしょうか。あなたの人格形成と政策策定に最も重要な影響を及ぼしたのはなんでしょうか」と質問したことがあった。

これに対して主席は、読書を好み、人民の中へ入って彼らと共にすごし、話し合うのがわたしの趣味だと言える、本が無言の教師であるなら、わたしの最も知恵深い博識な教師は人民で

ある、人民の中には哲学もあれば経済学もあり、文学もある、わたしは祖国の独立と繁栄を目指して闘う過程で、人民を信頼し、人民に依拠すれば百回勝利するが、人民に見捨てられたら百回敗れるという真理を感得し、この真理を座右の銘として革命と建設を指導してきた、人民大衆を革命と建設の主人として信頼し、人民大衆の力に依拠すること、これがわたしの政治哲学であり、これがわたしをして人民のために生涯をささげるようにしたのだったと語った。

この言葉は、金日成主席が革命闘争を開始した初期から身につけ、生涯具現してきた崇高な人民観の集中的な表現であった。

主席はこのような人民観に立脚して、革命活動に従事した全期間、**「人民の中へ入れ！」**というスローガンを掲げて常時人民大衆の中に入り、彼らの支持の下に革命活動を展開することを不動の生活信条、行動準則としていた。

主席は抗日革命闘争に従事した日々、人民大衆の中へ入り、彼らを革命化し、組織化する活動を精力的に進め、その過程で革命家の生命は大衆の中へ入ることから始まり、大衆と袂を分かつ時に終わるということを生活と闘争の哲理として確認し、思想的に目覚め団結した人民大衆の力をくじく力はこの世にないということを痛感した。

主席は祖国の解放を遂げてからも変わることなく人民大衆の中へ入り、彼らの無尽の力を引き出し、その力によってすべての試練を克服してきた。

チュチェ哲学は、人民大衆を最も尊厳ある有力な存在、歴史

の主体として押し立てる思想であるがゆえに、人民に人間の運命開拓の真の道を指し示す哲学として世界の広範な人々に受け入れられるようになったのである。

自主は社会・歴史の不変の軌道

社会・歴史の運動が主体をなす人民大衆の運動であると見る時、歴史の発展過程は人民大衆の運命の開拓の過程だと言える。

歴史の発展過程と運命の開拓を目指す人間の闘いは、数々の挑戦と試練を乗り越えてきた苦闘の連続として表現されるものであった。

その過程は、社会の発展と人民の力の増強を恐れる反動的な支配階級により歴史発展が阻まれ、抑えつけられたが、そこには一つの本質的な傾向があった。それは、歴史は一つの軌道に乗り、社会的存在としての人間の本性に即して前進してきたという事実である。

人間は自主性を渇望したが、それを実現する道は険しかった。人民大衆はその険しい道を乗り越えながら、自由と人権を獲得するために血を流し、一歩一歩歴史を前進させた。

歴史上、自主性を求める人民大衆の最初の闘いは、奴隷たちが血を流して奴隷主に反抗した暴動であった。奴隷の暴動は処々で止むことなく起きたが、奴隷主の野蛮な弾圧により一つとして成功しなかった。

古代社会における最大暴動として歴史に記録されているスパルタクスの暴動も数千名の奴隷たちが無残に処刑されることで幕を閉じた。

その後も奴隷の暴動は続き、奴隷制を維持することは自分たちにも不利だと悟った支配階級は、奴隷制を廃し、彼らの人格を認めて土地を貸与し農奴としてこき使った。農奴の移転や転職は許されなかった。こうして奴隷主たちは社会制度を封建制に変え、依然として支配階級として残存したのである。

封建的な土地所有関係と身分制度は、新しい形態で人民を搾取し、抑圧した。

封建的支配に苦しむ人民は、各地で百姓一揆や農民暴動などを起こして闘ったが、それらは個々ばらばらに行われる場合が多かった。時には内戦という性格を帯びて激しく闘う場合もあった。

1894年朝鮮で起きた甲午農民戦争はその一例である。この闘いは封建支配層を窮地に追い込んだが、外国侵略軍の干渉で失敗した。

その後に進められた人民の反封建闘争は、民族的従属を振り切る民族解放闘争の一環として進められた。

朝鮮人民は階級的および民族的従属からの解放を目指して反帝反封建民主主義革命という新しい形態の革命闘争を繰り広げた。

金日成主席の指導の下に進められた抗日武装闘争は、自主性を目指す朝鮮人民の闘いにおいて一つの転機となった。

こうして朝鮮人民は祖国解放(1945・8・15)の歴史的課題を達成して民族的自主権を回復し、さらに祖国解放戦争(1950・6・25〜1953・7・27)の勝利により、無残に蹂躙されていた過去の民族的悲運に終止符を打った。そして、引き続き社会主義革命を遂行して社会的・政治的自主性を実現し、自然と社会の一切の拘束を振り払い、自主性を完全に実現する上で決定的な成果を収めた。

自主性を確保するための朝鮮人民の闘いの歴史には、人類の歴史の合法則的道程が反映されている。

人民大衆は久しい歴史の流れの中で自主性を実現するための血みどろの闘争を続け、その中で古い社会の交替がなされた。しかし支配階級は、その支配を巧みに衣替えして別の搾取形態にすがりついた。

搾取社会の存在は社会の本性によるものか、人民が自由に暮せる社会とはどのようなものかと考え始めた人民は、社会的不平等の根源はなんであるかを究明し始めた。

奴隷制社会と封建制社会が崩れたのは、それらの社会が歴史の主体である人民大衆の自主的な本性と志向に合致しないからであった。

人民は自分たちが権力を手に入れずには自主性は実現しえないと気づいて、社会的・政治的自主性を実現すべく闘いに乗り出した。

自主性を目指す闘いは、国家による国家の支配と略奪を排撃する領域でも繰り広げられた。

人民大衆は国家・民族の絶対多数を占めており、したがって国家・民族の自主権はほかならぬ人民大衆の自主権である。それゆえ、国家・民族の自主権を守る人民大衆の闘いは、人類の歴史の全期間、どの国においても行われた。けれども歴史のいかなる時期においても、他民族に対する侵略と略奪を終わらせることはできなかった。

他国、他民族に対する侵略戦争や併合策動は、歴史的に民族・国家が出現した時期を前後した頃から現時代に至るまで止むことなく続き、他方では侵略に抗し、国家・民族の独立・解放を目指す人民大衆の反侵略闘争、解放闘争も激しく続いた。その結果、今日では植民地・半植民地国家はほとんど民族的独立を果たし、帝国主義の植民地体制は崩壊した。

こうして今世界の多くの国が自国人民の自主性に基づく新しい政治・経済秩序の確立に向けて奮闘している。

人民大衆は自主性を守る闘いを通して、人間による人間の搾取、階級による階級の抑圧を完全に終わらせ、旧社会が残した一切の悪弊を一掃し、その束縛から抜け出すであろうし、帝国主義者によって造成された古い国際秩序を打破し、国際社会の自主化・民主化を必ずや成就するであろう。

自主性を本性とする人民大衆が歴史発展の中心に立っている限り、社会・歴史の進む軌道は変わらないであろうし、すべての人間の運命もその同じ一つの軌道の上で止むことなく開かれていくことであろう。

社会・歴史は人民大衆の創造の歴史

人民大衆不在の社会・歴史なるものはありえないし、人民大衆の創造的本性を抜きにしたいかなる変革についても考えることはできない。

この世の社会的富のすべては人民大衆の手を経て生み出されたものである。

社会の発展は人民の創造的役割によってなされるのである。無為徒食する人間には創造の喜びなどはありえない。そのような喜びにひたれるのは働く人民大衆のみである。

社会の発展水準は人民大衆の発展水準により決まるのである。

マルクス主義は、物質的富の生産方式が社会の性格や発展水準を規定する決定的な要因であるとし、その説明として、機関車が出現してこそ機関士も出現するとした。しかし、ここには社会・歴史の発展に果たす人民大衆の創造的役割については言及されていない。

確かに、機関車が出現する前に機関士が存在するはずはない。ところが、人民大衆は何らかの機械の単なる使用者ではない。両者は創造者と被創造物という関係にある。創造が存在せずに創造物なるものはありえないし、創造者のレベルが高まると創造物の質も高まるのである。

自然を改造し、人間を改造する人民大衆の創造的活動によって、社会の一切の富が作り出される。

自然を改造する人民大衆の創造的活動の範囲が広がり、そのレベルが高まるにつれて、より新しい良質の生活手段や機材が作り出され、社会の富は不断に増えていく。

人間を改造する人民大衆の創造的活動のレベルが高まるにつれて、より進歩的で豊かな思想や道徳、科学技術や文学・芸術が不断に創造されて、社会の精神的・文化的富が増大する。

最も原始的な道具、打製石器を作り始めた人類の黎明期から多種多様な最新式生活手段や機材、新しい思想・文化が作り出されている今日に至るまでの人類の歴史は、人民大衆の創造的活動により社会の富が作られてきた歴史である。

人民大衆の創造的役割が不断に高まり、それにつれて社会の物質的・文化的富が増大するのは、社会の発展の必然的な成り行きである。

社会の改造に向けた人民大衆の創造的活動が強まると、古い社会的関係、社会制度は打ち壊され、より進んだ社会制度が出現する。

階級社会の全歴史的過程で社会の変革を目指す人民大衆の闘いは不断に強まり、その結果古い社会制度は捨て去られ、新しい社会制度が出現したのである。

奴隷制社会と封建制社会は既になくなり、資本主義という新しい社会制度が出現したが、これも労働者階級をはじめとする人民大衆の闘いにより大きく揺れており、その中で新しい社会制度を持つ社会主義諸国が出現している。このような社会制度発展の歴史的行程は、不断に強化されていく人民大衆の革命闘

争の必然的な成り行きである。

社会主義は社会を改造する人民大衆の創造的な闘いが強化されるにつれて敵対勢力の圧迫も強まっていくが、これにひるむことなく人民大衆は団結してより進んだ自分たちの社会制度を守り、社会生活の全般的分野を人民の本性的要求に即してあくまでもより良く改善すべく奮闘する。

このことからも理解できようが、そうした努力の中で人民大衆の発展水準、創造的役割の水準も高まっていくのであるが、そのような水準は結局、社会の発展水準を反映することになるのである。

自分の進むべき道をわきまえている人は目標もはっきりしているので速度を上げて進んでいくが、行く道の定まっていない人は取るべき道に迷い、さまよい歩くことになる。

人間は正しい思想、正確な知識を持ってこそ、運命開拓の正しい道を歩むことができる。

さもなくあてずっぽうに独りよがりに適当に道を選んで歩くのは主観主義、独断主義である。主観主義、独断主義を事とすれば、力と時間を無駄に使うだけで得るものは別してない。

目標に向かって速く、正確に進むには、客観的な法則を把握し、その法則に従って能動的に行動すべきであり、そうなれば目標に速く、正確に到達しうるのである。

こうした道理は、人民大衆が社会を改造する創造的活動においてもそのまま当てはまる。

人民大衆は不断に歴史を作り、社会を改造してきたが、以前は

自分たちの進むべき道を正しく判断して行動したのではなかった。

朝鮮人民は日本帝国主義の軍事的占領下で、国を取り戻し、民族の自主権を回復すべく多くの血を流した。占領軍を駆逐し、国の独立を果たすには、徒手空拳では目的が果たせず、何人かの力だけで成るものでもなかった。

強力な革命軍による全面的な武装闘争と全人民的抗争を結びつけて闘うことが最も正しい道であったが、このことに思いつくのは誰にでもできることではなかった。

李儁(1895～1907)は、国王高宗の密使として、1907年6月、オランダのハーグで開かれた第2回万国平和会議に臨み、ここで日本帝国主義の不法な侵略行為を暴露し、欧米資本主義列強の同情心を引き出すことで国権を回復せんものと図った。

ところが彼の切々たる訴えに耳を貸す者は一人としていなかった。彼は悲憤慷慨し、その場で割腹自殺した。

他方、日本帝国主義侵略者の巨頭を謀殺することで独立を果たしてみようとする人たちも現れて、彼らはテロリズムに走った。

安重根(1879～1910)は、1909年10月、中国のハルビン駅頭で朝鮮侵略の元凶伊藤博文を射殺し、その場で「朝鮮独立万歳！」を連呼して朝鮮人民の不屈の愛国的気概を高らかに誇示した。

けれども伊藤博文一個人を殺したからとして朝鮮が独立するはずはなかった。

朝鮮の民族主義者たちは、1910年に入り、国内の各地で繰り広げられていた朝鮮人民の反日義兵闘争が衰退すると、独立軍運動を開始した。

独立軍運動の準備を進めた人たちは、反日義兵隊長や愛国文化運動者たちであった。

彼ら民族主義者は、1919年の3・1人民蜂起を発端にして、独立軍部隊を組織し、武装闘争に乗り出した。

その後、中国の北満州に移った独立軍部隊の指揮官やソ連の沿海州などで組まれた独立軍部隊の指揮官たちがヘゲモニー問題をもって対立し、権力闘争の中で独立軍部隊は四分五裂した。

当時の独立軍部隊の兵力は劣弱であったし、それに独立軍の諸中隊は概して遊撃戦に不適切な平地の村落に駐屯していた。兵器は貧弱で、軍紀は乱れ、訓練もおろそかにされていた。とりわけ問題なのは、住民たちとの結びつきが弱いことであった。

当時、中国・吉林を中心にして初期革命運動に従事していた金日成主席は、民族主義運動団体の一つ国民府の巨頭に会って、国民府単独の力で日本帝国主義と戦って勝てる自身があるのかと質問したことがあった。すると彼は、とにかく頑張り続け、大国の支援を得て独立を果たす以外にないと、曖昧に答えたにすぎなかった。

戦ってきっと勝つという覚悟もなしに、大国の支援を当てにして盲目的に戦う独立軍は有っても無いに等しい存在であった。このように民族主義者による独立軍運動は真の独立の道ではなかった。

大勢の人たちが喉をからして独立万歳を叫び、血を流して侵略者に立ち向かいもしたが、いずれも失敗した。朝鮮独立の正しい道を知らなかったからである。

一定の社会・経済制度が立てば、必然的にそれに合致した社会の法則が作用するが、それは自然の法則と同様に客観的な性格を帯びるのである。

それら客観的な法則は、人民大衆の創造的活動の発展水準が高ければ高いほどより全面的、より正しく認識し利用されることになり、逆に創造的活動の水準が低いと、それだけ小さい範囲で利用されることになるのである。

人民大衆が客観的法則を正しく認識し、利用することができなくなると、社会的運動は明確な目的も方向もなしに、無意識的に行われる自然の運動と同様に、盲目的になされることになる。

社会・歴史の発展を目指す人民大衆の創造的活動において自然発生的な動きが生じる重要な原因は、客観的法則を認識し、利用しうるほどに彼らの意識水準が高くなく、ひいては彼らの創造的活動、闘いを妨げる古い社会制度が現存していたからであった。

人民大衆はその自主性、創造性、意識性の向上に伴い、自然と社会をよりいっそう広い範囲にわたり、より高い科学的方法をもって改造しようという高度の目標を立てて、積極的に活動するようになる。

人民大衆の創造的役割が強まるほど、それだけ社会的運動における自然発生性は縮小し、自然と社会は人民大衆のいよいよ強まる目的意識的活動により、ますます広く深く作り変えられていくのである。

運命開拓の基本的な方途

人々は久しい歴史を生きながらも、わが運命開拓の正しい道を知らぬままに生きてきた。

その道を把握しえたのは前世紀つまり20世紀のことであった。

それ以来人民は、意識的に世紀的な変革と創造に力強く取り組み、自分たちの境遇を積極的に改善していけるようになったのである。

古い社会制度を覆し、人間の自主性を束縛するすべての要因を払拭する闘いは、人間の運命に根本的な転換をもたらす歴史的な過程であった。

それ以前の人民大衆の社会的運動はいずれも運命の開拓に結びついてはいたが、それにより人間の運命を根本的に解決することは不可能だったのである。

自主性を守り、実現するための意識的な組織的闘争を通して、人民大衆の自主性の実現には根本的な変革が生じ、同時に人間の運命の開拓においても変革が生じたのであった。

人間の運命を切り開くには、その根本的な方法を知らなければならない。

人間の運命を切り開く活動は、それぞれの国や民族において、各自の実状に即して進められるのであるから、方法上の違いも生ずるであろう。しかし、そうした違いの中でも守られるべき最も一般的な方法がある。それは、革命と建設で堅持されなければならない根本的な原則と立場である。

自主的立場を守るべきである

人民大衆が革命と建設を進める上で絶対禁物とすべきことがある。それは自国・自民族を自ら卑下する民族虚無主義である。言い換えれば他国に対して己を低め、他国にすがって生きようとし、自国の物はみな価値がなく、他国の物はみなすぐれているとする考え方である。

それで、人間が事大主義を事とすれば愚かな者になり、民族が事大主義に走れば国が亡び、党が事大主義にかぶれたら革命を台無しにしてしまうと言われているのである。

人民大衆が革命と建設の主人としての地位をしっかり守り、わが運命を正しく切り開いていくためには、自主的立場を堅持しなければならない。

自主的立場は、人民大衆が革命と建設の主人、自己の運命の主人としての地位を守る根本的立場であり、その基本的な要求は、革命と建設の主人としての権利を行使し、主人としての責務を全うすることである。

この立場は、一切の従属を振り切り、自主的に生きようとする人民大衆の根本的な志向に全面的に合致している。

自分自身の独自の判断や決心に基づいて自国人民の利益に即し、自分自身の力に依拠して革命と建設を進めていけば、人民大衆の自主性が実現する新しい社会が生まれ、人間の運命の開拓で根本的な転換が起こりうるのである。

「二つの椅子にまたがって腰掛けている」という言葉がある。情勢や環境の変化を見ながらあちらについたりこちらについたりする、二股膏薬的行動をする人間を指して言う言葉である。

個々の人間の場合だけでなく、革命と建設を進める上でも、自分たちの主体性を確立し、独自の判断と決心に基づいて一切の問題を処理することが格別に重要である。

1960年代半ばのこと。日和見主義者たちが自分たちの意向に従わない国々を非難し、朝鮮に対しては「二つの椅子にまたがって腰掛けている」となじったことがあった。

これに対して金日成主席は、それはたわいのない言い草だとして、われわれには自分たちの椅子がある、われわれが何がゆえに自分の椅子を捨てて他人たちの椅子の間に窮屈に股を掛け渡して座っていられようか、自分たちのまっとうな椅子に座っているわれわれに、二つの椅子に座っているなどと言いがかりをつける人たちこそ、傾いた左の椅子か右の椅子の一方に腰掛けていることに間違いないと応酬した。朝鮮の党に言いがかりをつけた者たちは、この名言に一言の反発もできず黙り込んでしまった。

自主的立場に欠けていると、思考力が麻痺し、正邪の区別がつかなくなる。

そのような人たちは、自国の問題を自らの責任で解決しようとするのではなく、他国の支援に期待をかけてなんとかしてみようとする過ちを犯すことになる。

金日成主席は、朝鮮革命が勝利するまで絶対に「延吉爆弾」を忘れてはならないと、朝鮮人民を戒めていた。

「延吉爆弾」は、抗日武装闘争が開始された初期、遊撃区の武器修理所で自製していた炸弾という小型爆弾で、日本軍との戦いでこの炸弾が大きな威力を発揮して「延吉爆弾」と呼び始めたが、やがて遊撃隊内でもその名で通用するようになった。

そのしばらく前、間島のある遊撃区の人たちが手榴弾工場を建ててみようとして、ソ連に援助を要請したことがあったが、梨のつぶてであった。

先に革命に勝利して政権を握った国が革命闘争の途上にある国の人民を支援するのはプロレタリア国際主義者の責務だと考えていた人たちは、その冷淡な態度に当惑し、思想的・精神的混乱に陥っていた。

金日成主席は、愚かにも外国に援助を求めた間島の人たちの誤った行為を重視し、革命隊伍の中に自力更生の革命精神を植えつけるべきだとして、すべての遊撃隊員と遊撃区の住民たちに、自力更生のみが生きる道だということを信念とするよう教え励ました。そんな中で「延吉爆弾」が生み出されたのである。

もしあの時、外国の援助を待ち続けて自力更生に努めなかったとしたら、「延吉爆弾」は日の目を見なかっただろうし、ひいては抗日武装闘争も中途で挫折したことだろう。

朝鮮革命の歴史に一貫している自力更生の伝統の嚆矢として呱々の声を上げたところに、朝鮮革命における「延吉爆弾」の意義があるのである。

この「延吉爆弾」の例で見られるように、革命と建設において持ち上がる問題はいついかなる場合も自分たち自身が責任を持って解決していくべきであり、そうするところに人民の運命を開拓する根本的な道があるのである。

歴史を振り返ってみると、朝鮮に事大主義が生じたのは3国時代末期の新羅の支配層によってである。それは、朝鮮封建王朝(1392～1910)末にとりわけ著しくなり、国家・民族の発展に甚大な弊害を及ぼした。

封建支配層は、対外的には大国崇拝と屈従を事とし、対内的には党派争いに明け暮れて、日本や欧米資本主義諸国が朝鮮に侵略の魔手を伸ばした時、人民の力を動員してこれを追い払おうとしたのではなく、各党派が思い思いに外国勢力と結び、その力を借りて残命を維持せんものとしてあがいた。こうして、親日派が権力の座に着くと日本軍が王宮を守り、親ロ派が優位を占めるとロシア軍が国王を保護し、親清派が頭をもたげると清国軍が王宮の守備につくという有様であった。

王宮の守備を外国の軍隊に任せているのだから、国家・民族の運命がどうなるかは明々白々であった。

1905年に至り朝鮮の外交権が日本に奪われたのであるが、1910年には日本の植民地に転落し、それ以来朝鮮民族は40余年もの間亡国の民として生きることになったのである。

外国の力にすがりついたことが災いして国家・民族が悲運にあえいだ例は朝鮮のみならず外国の歴史でも見られる。

歴史の経験と教訓は、わが運命を正しく切り開いていくため

には、自己の信念をしっかり守り、常に運命開拓の途上に横たわるすべての問題を自らが責任を持って解決していかなければならないと教えている。

それゆえに朝鮮労働党の金正恩（キムジョンウン）総書記は、朝鮮人民は歴史がこれまで知ることのできなかった長くも過酷な環境の中で、自らの力で生きていく方法、敵や困難に打ち克つ方法、自己の尊厳と権利を守る方法を学んだとし、刻苦勉励して必ずや自力富強、自力繁栄を遂げることで国の尊厳を守り、帝国主義を打破せずにはおかないということがわれわれの不屈の革命的信念であると闡明したのである。

革命と建設で持ち上がるすべての問題を自らの判断と決心に基づいて処理し、自らが責任を持って解決していくことこそが人間の運命を開く根本的な方法である。

創造的立場を守るべきである

人民大衆が自らの運命を正しく開いていくには、教条主義を根絶し、創造的立場に徹するべきである。

自主的立場は革命と建設の主人としての地位を堅持する立場であり、創造的立場は主人としての役割を全うする立場である。

創造的立場は、人民大衆が自然と社会の改造者、自己の運命の開拓者としての役割を果たす立場であり、その基本的要求は人民大衆の汲めども尽きない創造的な力を確信して、すべての

問題を人民大衆の創造的な力に依拠し、創造的方法で解決していくことである。

一言でいって、創造的立場は革命と建設において持ち上がるすべての問題を人民大衆の創造的な力に依拠し、それぞれの具体的な実状に即して解決していく立場である。

革命と建設は人民大衆が自然と社会を改造する活動であるのだから、そのためには、一方では人民大衆の創造的な力を全面的に引き出し、他方では自分たちの具体的な実状に即して活動を進めていくことである。

金日成主席の回顧録**『世紀とともに』**は出版されるや朝鮮人民はもとより、世界の人民の間で嵐のような反響を呼んだ。

主席は回顧録の冒頭で、わたしのこの書が人民を信頼し、人民に依拠すれば天下を得て百回勝利し、人民を遠ざけて彼らから見捨てられれば百回敗北するという真理、生と闘争の教訓が後世の人たちに伝えられることを願っていると述べている。

人民の中から闘士が現れ、知恵と才能に長けた有名人も現れ、人民の中に哲学も経済学も文学もある。

以前から多くの人たちは、社会的矛盾を解決しうる力をどこに求めれば良いかについていろいろと考えたが、科学的世界観に欠けていたがゆえに、正しい解答を見いだすことができなかった。

革命と建設において依拠すべき力は、ほかならぬ人民大衆の創造的な力である。だから彼らの知恵と力を最大限に引き出せば、不可能なことはありえない。

人民大衆は革命と建設を遂行できる底知れない力を持っており、人民大衆より聡明な存在はない。

革命に従事する人たちが信頼し、よりどころにすべきものは人民大衆であり、彼らの力と創意を引き出せば、革命と建設におけるいかなる困難な問題も順調に解決していけるのである。

これまで革命を志し、闘いに乗り出しながらも途中で挫折した場合の原因を見ると、おしなべて人民大衆の力に依拠することなく限られた人たちだけで闘ったところにあり、勝利した革命の場合は、人民大衆を闘いに引き入れ、その力に依拠していたということが分かる。このような歴史的経験からして、革命に勝利する主な要因が人民大衆の積極的な参加にあるということをはっきりと知り、人民大衆を闘いに正しく組織し動員することに努めるのが重要である。

革命と建設に参加する人民をむしばむ悪性腫瘍は、教条主義である。教条主義は周りの具体的な状況には一切おかまいなく既成の理論に機械的にすがりついたり、他の経験を無批判的に踏襲して活動するやり方である。いわば何かの食べ物を、味を見もしないで鵜呑みにすることである。

朝鮮戦争直後の復興建設が始まった際、建設部門の設計技師たちは下水道の設計で、朝鮮の気候からすれば下水道の深さを3メートルほどにすれば十分であるにもかかわらず、外国の設計そのままに深さを5～8メートルに定めることで、多くの労力と資材を浪費してしまった。

ある年のこと。外国の農場で輪作農法を行っている状況を見

て帰ったある幹部が、朝鮮でも輪作法を取り入れようと言ったことがあった。

その時主席は彼に、その国のように領土が広いなら輪作も悪くはなかろうが、耕地が限られているわが国では不都合だ、わが国に輪作農法を取り入れたら人民を飢え死にさせないとも限らない、人民が食べ物に不自由することなく豊かに暮せるようにするには、わが国の実状に即して農事を進めるべきだ、田畑に客土をし土壌を肥沃にして農事を行わなければならないと言って聞かせた。

自国の実状を考慮せず、やみくもに外国のものをそのまま受け入れていては、革命も建設も正しく進めることができない。

それゆえ革命と建設では、すべての活動をあくまでも自国の具体的な実状に即して進めていくことが何よりも重要である。

各国・各民族の歴史はそれぞれ異なり、経済の発展状態や自然地理的環境も同じでなく、人々の意識や心理状態、風習や生活方式にもそれぞれ違いがあるのだから、いかにすぐれた処方であっても、世界のすべての国や民族に一律に当てはめることはできないのである。

それゆえ、具体的な条件を確かめた上で適切な理論、方法を編み出し、持ち上がった問題の解決に当たるべきであり、そうすることで革命と建設は順調に進むのである。

外国のすぐれた経験や成果も、自国の環境や条件とは違った状況の中で成されたものであるから、その経験を導入する場合は、自国の具体的な現実に合わせて取捨選択し、手直しをし

て適用すべきである。つまり何事であれ創造的に進めることである。

すべての問題を自主的な立場で創造的に解決していくことは、金日成主席が祖国の解放を目指す闘いに乗り出した当初に発見した真理であり、主席が創始したチュチェ思想の原点の一つである。

当時、朝鮮の民族主義者たちは、人民大衆を反日闘争に立ち上がらせることは念頭になく、ヘゲモニー争いに明け暮れ、大国を後ろ盾にし、その支援に期待をかけて独立を達成せんものと夢見ていた。

初期の共産主義運動参加者たちも同様であった。彼らはあれこれの分派に属していがみ合い、自分たちの党派こそが朝鮮共産主義運動の正統派だとして、てんでにコミンテルンの承認を取り付けようとして血眼になっていた。

金日成主席は回顧録で、自分は、わが国の民族主義運動と初期共産主義運動のそのような実態を分析してみて、革命をそういうやり方で進めてはならないと痛感し、革命は自らが責任を持ち、自国人民の力に依拠して遂行してこそ勝利するのであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念を抱くに至ったと述べている。

このような信念に燃えて闘ったからこそ、朝鮮人民は祖国解放の歴史的大業を成就し、民族の運命を切り開く上で一大変革を遂げたのであった。

革命と建設において持ち上がるすべての問題を自主的、創造的に解決していくべきだとすることは、歴史によって明らかにされた真理であり、人民大衆の運命を開いていく根本的な方法である。

思想を基本とすべきである

自主的立場、創造的立場を守ると共に思想を基本とする原則は、革命と建設において堅持すべき根本的な原則である。

革命と建設を進める上で人々の思想を基本とする原則は、人々の思想が革命と建設において決定的役割を果たすということを明確に認識し、人民大衆の思想意識を高めることで持ち上がるすべての問題を解決していくことである。

人間は意識性を持つ社会的存在であり、その自主的な思想意識が革命と建設において決定的な役割を果たすことになるので、万事人々の思想を基本に捉えて進める原則に徹すべきである。

人民大衆が運命開拓の道を成功裏に歩み続けるためには、革命と建設において思想的要因に決定的意義を付与しなければならない。

それは、革命運動と建設事業に作用する物質的要因と人間の思想的要因のうち、決定的な役割を果たすのは思想的要因だということである。

朝鮮戦争は俗に小銃と原爆の対決であったと評されている

が、この小銃をもって原爆の脅威に立ち向かった朝鮮人民が勝利したのは何ゆえであったのか。それは、朝鮮人民の旺盛な精神力、不屈の思想の力が敵の強大な軍事力を圧倒したからである。

革命と建設における物質的要因の果たす役割はもちろん過小評価すべきではないが、それによりすべての成果が決定付けられるのではない。また、そこに作用する客観的法則も人々の活動によってのみもたらされ作用するのである。

こうしてみると、革命と建設においてその成果を左右する決定的な要因は物質的要因ではなく、思想的要因であることが分かる。

ところで世間で、しがない暮らしをしていたある個人が思いもよらず大きな幸運に恵まれて財産家になるようなことがあると、俗に彼の運命に奇跡が起きたとして騒ぎ、羨みもすることがごくまれながら起きることがある。

奇跡が自分にも起きることを願うならば、それがいかなる原因、いきさつで起こり、その経過はどのようなものであるかを正確に確かめ、それが自分にとっても可能だと考えたら、その道を積極的に開いていくことができるかも知れない。

ところが、そのような努力はせず、自分にも同じような奇跡が起きないとも限らないとして無為に日を送っている人も多い。

偶然に期待をかけている人間に奇跡的に幸運が転がり込んでくるかどうかは未知数で、偶然に奇跡が起きる裏づけはどこに

もあろうはずはないのである。

可能性のまるでない僥倖に期待をかけて奇跡の到来を待つ人間に残されているのは、空虚な意味のない人生である。

金日成主席はそのような現象を評して、何もせずじっと座り込んで勝利を待ち構えている人たちは、柿の木の下で熟れた柿の実がひとりでに落ちてくるのを待っている人間と何ら変わりがないと揶揄したものである。

精神力とは、精神つまり思想が発揮する力である。

ここで強調したい精神力とは、人民大衆が自分たちの自主性を実現し、国家・民族の自主的な発展と繁栄を遂げるための革命闘争と建設事業において発揮する思想的・精神的な力である。言い換えれば、自己の運命を自らの手に握り、自分たち自身の力で開いていこうとする人民大衆の透徹した自主精神、信念と意志の力である。

金正日（キムジョンイル）国防委員長は生前、人民大衆の強力な精神力は国家・民族の明るい前途を約束する国力中の第一の国力だと強調していた。

国家・民族は人々の運命を開く基本的単位であり、国家・民族の運命と未来は国力によって決定されるのである。

国力は人民大衆の政治的・思想的力と軍事力、経済力を基本的な要素として成り立っているが、ここで最重要な要素は思想的要因つまり人民大衆の政治的・思想的な力、精神力である。

人間の精神力は無尽であり、人民大衆がその強力な精神力を発揮すれば、この世に不可能事はない。ゆえにいかなる国家や

民族もそれぞれ固有の精神力に依拠し、それを積極的に発揮させるべく努力しているのである。

朝鮮人民は歴史発展の全期間、民族の偉大な精神力をもって万難に打ち克ち、自己の運命を成功裏に開いてきた。

日本帝国主義侵略者を打破し、国の解放を成就したのも、解放後の国づくりで民主改革を急速に遂行し、3年間の祖国解放戦争で勝利したのも、民族の精神力が余すところなく発揮されたからであった。

朝鮮人民はこれにとどまらず、いち早く戦後の復興建設を済ませ、引き続き国の工業化に取り組み、わずか14年間でこの歴史的偉業を完成し、帝国主義諸国の悪辣な制裁と封じ込めの続く中で社会主義を守り強化してきたのも、人民大衆の不屈の精神力がその底にあったからである。

前世紀の90年代中葉、金日成主席の逝去(1994・7・8)という朝鮮民族最大の痛恨事に見舞われたことを奇貨おくべしとして、敵対勢力は朝鮮に対する政治的・経済的・軍事的圧迫と封じ込めに狂奔した。かてて加えて数年にわたり自然の災害が朝鮮を打撃し、甚大な食糧難、動力難、燃料難に朝鮮は苦しんだ。

朝鮮の事情に詳しい人たち、敵国の人たちも、朝鮮人民がそのような苦難に耐え抜くことはむずかしい、もし耐え抜いたとしたら奇跡だとしていた。

ところが金正日国防委員長の指導の下、朝鮮人民は苦難に打ち克った。単に打ち克っただけではなく、あの苦難の中で社会主義強国建設の土台をしっかり築いたのであった。

この奇跡の源泉こそがほかならぬ朝鮮人民の精神力だったのである。

歴史は、人民大衆が強大な精神力を発揮すれば自分たちの運命を立派に開いていき、国家・民族の隆盛・繁栄を遂げるということを立証した。

今日も朝鮮では労働党の指導の下、人民大衆の精神力の高揚に大きな力が傾けられており、人民の夢と理想は着実に一つ一つ実現されているのである。

むすび

偉大な指導者の思想は偉大な実践を生む。

朝鮮人民は、国家・民族の偉大な指導者を迎えたことで真正な思想を抱き、波乱万丈の受難の歴史に終止符を打ち、自らの運命を自主的、創造的に開いていく人民となった。

わずか1世紀前までも光を失っていたこの地に人民の国、社会主義朝鮮が立ち上がったのは、チュチェ思想という偉大な武器があったからである。

偉大な指導者の思想の波及力は絶大である。

思想は人々に強要できるものではない。それが時代の要請、人民の志向と念願に合致すれば自ずと世に広がるのである。

今日、チュチェ思想は一国一民族の枠を抜け出して、進歩的人民の真正な世界観、時代の基本的な思潮になっており、従属と不平等を押し付ける一切の支配と専横に立ち向かう有力な闘争の武器になっている。

朝鮮人民は、チュチェ思想が指し示す進路こそが人民のための道、人間の運命を開く最も正しい道だと確信している。

それゆえに朝鮮人民は、今日もチュチェ思想の旗を高々と掲げて、社会主義強国建設の大業を一日も早く実現すべく力強い前進を続けているのである。

人間の運命とチュチェ哲学

執　筆: 李光日
編　集: 安鉄鋼
翻　訳: 金時習
発　行: 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日: チュチェ111(2022)年6月

E-mail:flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2129-4